

じれったい

アイツ



ひどい歓迎

やっぱり都会は違う。

何しろ周りに山が見えないもんなあ。

それに気のせいか、道行く人達の顔も垢抜けて見えるよ。

って言うか、それは気のせいじゃないね。

私だけが田舎者って訳か。

何だか憂鬱だな。

神様、どうか方言が出ませんように。

私は早乙女愛美。17歳の高校2年生。

父親の転勤で仙台から東京の私立橘高校に転校してきていたのであります。

そしてゴールデンウィーク明けの今日がその記念すべき第1日目ってわけ。

ううっ、まずい。

私って緊張しいだから、なんかお腹が痛くなってきちゃったよ。

まいったな。

イテテテ・・・。

職員室はこれで2度目。やっぱり田舎の学校とはケタが違うな。

広さだけでも前の学校の2倍はある。それに先生の数も多いなあ。

とても同じ系列の学校とは思えないよ。

と感心してる場合じゃないか、私の担任の岡島先生はどこかな？

んーと・・・あっ、居た居た。

「岡島先生、お早うございます。早乙女です」

「やあ、お早う。今日が初日だね。緊張してる？」

「は、はい。何だか胃が痛くなってきました・・・」

「アッハッハ！ まあそんなに緊張しなさんな」

岡島先生って、結構カッコイイんだよね。

それに若くて独身。

この間、転校の手続きで来た時も優しくしてくれたし、何だか私ファンになっちゃいそう。

こりゃ、転校早々縁起がイイね。

岡島先生に連れられて2年C組の教室に入った。

うわっ、みんな何だかお行儀がイイなあ。

ちゃんと席について先生を待ってたんだ。

前の学校ならホームルーム前は教室のあちこちで固まってトランプとかお喋りをしてて、先生が来ると慌てて自席に戻ったものだったけど。

まずい、緊張してきた。

「お早う！ 先日も話したように、今日から新しい仲間が増える。早乙女愛美君だ。みんな仲良くやってくれよ」

シーーーーン……。

「それじゃ、早乙女。みんなに挨拶して」

「は、はい……」

何だか、やりにくい。みんな何となく醒めた目で見てるよ……やな感じ。

「あ、あの、私は宮城県仙台市の橘学園高校から来ました。

えっと、父の転勤のためです。

そ、それで、前の学校はこちらの系列ということで橘高校にお世話になることになりました。

ど、どうぞよろしく申し上げます・・・」

一応、ペコリとしおらしくお辞儀をしてみたりして。

でも、相変わらず、

シーーーーン・・・。

感じわるっ！

「それじゃ、早乙女はこの列の1番後ろの席に座ってくれ。それじゃ、出席を取るぞ！」

一応、言われた通りに着席したけど、何だか全然落ち着かないよ。

誰も私に関心ナッシングって感じ。

あーやだ・・・。

ホームルームが終わって岡島先生が教室を出ていってからも周りの様子は全然変わらなかった。

みんな整然と1限目の授業の準備をしちゃったりなんかして。

誰も私と目すら合わせようとしなないよ。

本格的にシカトかよ。

めっちゃ気まずいんですけど。

私は出来るだけ顔を動かさないようにして、目だけキョロキョロとさせて辺りの様子を窺っていた。

とその時、教室の真ん中くらいの席に座っている、嫌味なくらいにお上品な女子が私を冷ややかな目で見た。

一瞬だけ目が合った。

私は少し引きつりながら愛想笑いをした。

そしたらその女が言いやがったの。

「みなさん！ 新入りさんはお作法をご存知ないようすわ」

ここで初めて教室内にドッと笑いが起きた。

さ、作法？

何よそれ？

「転校初日に手ぶらでくるなんて常識的に考えられないよね」

「ホント、神経疑うよ」

「これだから田舎者は嫌になっちゃうよな」

「やっぱり幼稚舎から橘学園育ちじゃないと、その辺の常識も身に付かないってことかしらね」

うっそ・・・こいつら私に貢物をよこせて言ってるわけ？

信じられない。

そりゃ引っ越して来て、ご近所さんには仙台銘菓を配ったけど、学校でも同じことしなきゃ駄目なの？

それって、常識？

何だか私は急にその場にいたたまれない気持ちになった。

こんなことになるって分かってたら、私1人だけ仙台に残って向こうの学校を卒業した方が良かったな。

父さん、恨むよ・・・。

イジメの始まり

すっげえムカつく気分だったけど、学校帰りに洋菓子店でクッキーを3箱も買い込んだ。

それと、ホームセンターで可愛い紙袋とリボンをクラスの人数分買ったんだ。

お小遣い少ない中で、この出費は痛いよ・・・。

家に帰って、私は早速貢物づくりに精を出した。

まずクッキーを均等に分けて紙袋に入れて、それと一緒にお手紙も入れてからリボンで口を縛る。

かー・・・面倒くさい。

大好きな人にプレゼントするなら別だけど、あいつらに渡すためだと思うと余計に辛い作業だわ。

でも、辛抱辛抱・・・。

私は超人的な忍耐力で、とうとう最後の1個を仕上げた。

でも、作る前に考えてなかった大問題に気がついた。

「この紙袋の山、明日どうやって学校に持っていったらいいのよ・・・」

私は自分の浅はかさを思い知らされて、ますます落ち込んだ。

翌朝、私は嫌がる弟の翔太に半ば強引に頼み込んでクッキーの紙袋を詰めた大きな紙バッグを2つ持ってもらった。

もちろん私も同じ物を2つ抱えて、ひ～こら言いながら学校に向かった。

弟が同じ学園の中学部でホントに助かったわ。

後で何か奢って口封じをしないとね。親には余計な心配かけたくないし。

教室に入ると幸いなことにまだ誰も来ていなかった。

私と翔太は急いで全員の席の上に紙袋を置いて回ったの。

「これでよし・・・サンキュー翔太。もう中学部に戻っていいわよ」

「姉ちゃん、後で絶対何か奢ってもらうからな！」

「ハイハイ、分かってる」

相変わらず卑しい奴。でも今回は助かったから、超特大ハンバーガーでも食わせてやるか。

クッキーの袋を配り終わった私は、そのまま自席で同級生達が登校してくるのを待っているのも気恥ずかしいので、始業時間ギリギリまで校庭で暇つぶしをしてから教室に戻った。

その日も同級生達は私に何のコンタクトも取ってくれなかった。

何だか期待外れでガッカリしながら帰ろうとしていると、やっと声がかかった。

「早乙女さん。ちょっと」

待ってましたとばかりに私は満面の笑みで顔を上げ、声の主の方を向いた。

ゲッ、あの女だ。

昨日のイヤミ女王だ。

名札を見ると谷岡道子と書いてある。

「谷岡さんですね。私、昨日は気が利かないで申し訳ありませんでした」

「これなんだけど」

谷岡道子は私が配ったクッキーの紙袋を差し出した。

「せっかく用意してくれたのに悪いんだけど」

「私、安物のクッキーは口に合いませんの。だからお返しするわ」

谷岡道子は紙袋を私の机の上に置いた。

それが合図でもあったかのように他の同級生達も、俺も私もと返品の嵐。

アッと言う間に私の机の上は商売が出来そうなくらいにクッキー袋の山となってしまったの。

その山を呆然と見つめて私はしばらく声も出せなかったわ。

「冗談を真に受けるとは、やっぱり田舎育ちは常識が通じないぜ」

「しかも下手なラブレター入りだもんな。『アイミーって呼んでください』だってさ。読んでるこっちが恥ずかしくなるよ」

「全くだ。アッハッハ！」

く、く、くっそー！

この純真な愛美様をだましたのね。

人が下手に出てればいい気になりやがって。

張り倒してやろうかと思って顔を上げたら、教室にはもう誰も居なかった。

「もう・・・どうすんのよこの返品の山・・・」

翔太を携帯で呼び出そうと思ったのに、あの野郎は出やしない。

全く肝心な時に頼りにならない男だよ。特大ハンバーガーは取り止め。

1人プリプリ怒りながら返品の山を紙バッグに詰め戻し始めた。

その時、

「お嬢さん、こんな所で店開きかい？」

教室の後ろの扉から見知らぬ男が覗き込んでそう言った。名札の色を見ると3年生らしい。

しかも、ちょっとイイ男。

それまで目を吊り上げて怒っていた私は一瞬のうちにブリッコ顔になっていた。

「転校の挨拶にクッキー配ったんですけど、みんなのお気に召さなかったみたいで・・・ご覧の有様です」

「ハハハッ！ あいつらにしてやられたって訳ね。お前、転校生なのか」

「早乙女愛美です。仙台の橘学園高校から来ました。よろしくお願いします」

「橘学園高校？ ああ、あそこは俺の叔父きが理事長やってんだ」

「えっ？ 理事長を？」

私は改めて彼の名札を見つめた。『橘健二』と書いてあった。

「あの、橘さんって、もしかして学園の関係者なんですか？」

「ああ、お前は転校生だから知らないよな。この学園の始祖は俺のひいひい爺さんさ」

ひえ～～！ お坊ちゃまのお出まじだわ。

しかも、こんなカッコ悪いところを目撃されるなんて最悪……。

「その紙袋、どうするつもりなんだ？」

「どうするって、おとなしく持って帰るだけです」

「で、全部1人で食う？ 太るぜ」

このっ！ 最近気にしてることをズケズケと。

お坊ちゃまだと思って勝手なこと言いやがって。

「もし良かったら俺が全部引き取ってやるぞ」

「へっ？ 全部？」

「ああ、ほらこっちに寄こしな」

「はい、どうぞ・・・」

「サンキュー、それじゃまたな！」

その4つの紙バッグを軽々と持つと橘健二は去って行った。

私はこの展開がまだ信じられなくて、ただ呆然として見送るしかなかった。

イイ男だけど、なんだか偉そうな態度。

学園創始者の末裔と言うことは、ここを牛耳っているってことかな？

とすると、あのイヤミ女王も彼の手先って訳？

『私、安物のクッキーは口に合いませんの』だと。あー思い出ただけで腹が立つわ。

だけど、あの大量のクッキーをどうするつもり？

持って帰らなくて済んだのはラッキーだったけど、まさかあの人が全部食べる訳じゃないよね？

「あっ！ しまった！」

紙袋の中に同級生に宛てた手紙が入ったままだった。

まずいよ・・・個人情報バリバリ書きちゃった。

まさか同級生以外の人の手に戻るなんて考えてなかったから、少しでも気に入られようと思って書き過ぎてしまったよ。

名前、住所、誕生日、好きな食べ物、音楽の好み、携帯メールアドレス、あとは・・・『アイミーって呼んでください』ってやつ。

アチャー・・・どうしようかな。

廊下に出て少し探してみたけど、もう橘健二の姿はどこにも無かった。

そして想像通り、いや想像外と言った方が良いような変化が私を待ち受けていたんだよね・・・。

人気者？

その夜から私の携帯にメールが入り始めたの。

やっぱり恐れていたことが現実になってしまった。

その日寝るまでの間に次々と20通くらい来ちゃったんだよね。

あのお坊ちゃま、きっと私のクッキーを配りまくったんだ。

もう私は裸の王様だ。

メールも見ることがない。

どうせ誹謗中傷の嵐に決まってるもん。それに私は田舎者まる出しって感じだろうし、からかいの対象としてはもってこいだよね。

あー、明日学校に行きたくないよ。

どうしよう……。

朝になって驚いた。

メールが100通を超えてるんだもん。

どういうことよ？

クッキー袋は30個位しかなかった筈なのに。

私はおっかなビックリ受信ボックスを開いてみた。

サブジェクトには何だか予想と違う文字が並んでる。

『これからもよろしく！』

『初めまして！』

『美味しかったよ』

『自己紹介します』

『お返事待ってます』

等等。

何よこれ？

めっちゃめっちゃ好印象なんですけど。

ちょっと読んでみるか。

私はとりあえず上にあるやつから順番に開いて読んでいった。

ほとんどが3年生からのメールだった。

何だか知らないけど、私の転校を歓迎するムードに満ちたメールばかり。

そして、何通目かのメールを開いた時だった。

送信日時：

20XX/5/10 23:43

FROM：

橘健二

サブジェクト：

『橘です』

内容：

『今日のごちそうさん。なかなか美味しいクッキーだったよ。俺の仲間で山分けして頂きました。

でも中に手紙が入っていてビックリしたよ。おかげでお前のことが随分と分かった。でも自宅住所まで公開しちゃって良いのか？ ストーカーがワンサカ押しかけるかもしれないぞ（笑）

それはさておき、学校では不愉快な思いをさせたみたいだな。俺から謝るよ。

明日からは、きっと雰囲気も変わるだろう。1日も早く我が橘高校に慣れてくれたまえ。

それじゃ、また！』

何だか狐につままれたような気分だった。

朝から好意的なメールを、しかも全て男性からのメールをこんなに沢山もらってしまって・・・

でも、正直嬉しかった。

昨夜の憂鬱な気分は吹き飛んで、何だか爽快な気分になってきちゃったよ。

私は部屋を出ると両親と弟が待つダイニングに行った。

「グッモーニン！」

「お早う、愛美、どうだ学校の方は？」

「うん。いい感じだよ、父さん」

「姉ちゃん、いつ奢ってくれんだよ？」

「分かってるわよ。うるさいわね。そのうちよ、そのうち」

「はい、お弁当ここに置きますからね。忘れないで」

「うん、ありがとう、お母さん」

「姉ちゃん、やけに今日は機嫌がいいな」

「当たり前でしょ、楽しい1日が始まるのよ」

ゲンキな私なのである。

校門が近くなるにつれて私は声をかけられることが多くなってきた。

「お早う！」

「アイミーちゃん！」

「お早う、アイミー！」

「グッモーニン！」

おいおい、この変わり様は何なのよ……。

しかも声をかけてくれるのは見知らぬ男子ばかり。

まあ、おそらく昨夜のメールの送り主達なんだろうけど、もう私の顔まで知ってるんだ……。

こりゃ、あの100通にちゃんと返事をしとかないとマズイかも……あーメンドい。

とりあえず私は声をかけられる度に、出来る限り可愛い顔をつくって挨拶を返した。

もう顔の筋肉がつりそう。

教室に入る時、私は少し緊張していた。

肝心の同級生達はどうかだろうか？

それが1番心配・・・。

後ろのドアを開けた。

カラカラカラッ。

「お早う」

「お早う」

「お早う」

「お早う」

あらら・・・こりゃまた判で押したように画一的な挨拶だこと。

それでも私は精一杯の笑顔で応えた。

「お早う！ 今日もイイ天気だね。最高の気分ね！」

嗚呼、何と健気な私。

しかし、お坊ちゃまの影響力って凄いな。一体何をしたんだろ？

まるで一夜にして地獄から天国に来ちゃったみたい。

こりゃ、逆の意味で怖いよ・・・。

妙な胸騒ぎ。

嵐の予感ってやつ？

思わず体がブルッと震えた。

裏切り者

やっと平穏な日々が訪れていた。

だけど、やっぱり何か物足りない。何でだろ？

同級生は一見普通に私に話しかけてくれるようになった。

だけど、何だか違うって感じちゃうんだ。

何て言うか、予め決められたセリフを言っているような感じとでも言うか。

基本的に真面目な人達なのかな？

授業や学校での生活に必要なことは十分に意思疎通してくれるんだけど、プライベートに踏み込まないと言うか、心からうち溶け合っていないと言うか・・・。

結局のところ、私は彼らから見たらよそ者ってことなのかな。

私以外の人達は幼稚園から橘学園で育ってきた。

でも私は高校から。

この差は大きいよね。

まして私が通っていたのは同じ橘学園グループでも地方の学校であって、ここに居る人達とは環境が全然違うもの。

地方の支店から突然東京の本店に異動になったようなものだよね。

父さんと同じか。

父さんは上手くやってるのかな？

って、会社と学校じゃ違うか。

そう言えば、お坊ちゃまは時々ウチの教室に顔を見せているな。

定期的な巡回？

それとも、また私がいじめられてないかチェックしてるの？

それは無いか・・・。

単に何か用事があってのことだよな。

私になんて、いちいち構ってるほど暇じゃないよね。

最近3年男子達のメール攻勢も一段落したみたいだし、気楽と言えば気楽。でも寂しいと言え
ば寂しい。

こんな高校生活を送るようになるなんて想像もしてなかったな。

中学の頃なんて、高校に入ったら素敵な恋の1つや2つもして、カッコイイ彼氏を作って毎日が
バラ色の生活になると思ってたのに。

そうだよ。これでも仙台に居た頃は私も結構モテてたんだからね。

特定の彼氏は居なかったけど、男子と一緒にカラオケ行ったり川原で芋煮会やったり・・・って
東京じゃ芋煮会は無いか。

でもこの学校では同級生同士の交流なんて見かけないなあ。

みんな個人主義的というか唯我独尊というか。

こんな風にして貴重な高校生活が過ぎちゃうの？

つまんない・・・。

6月に入って間もない頃だった。

私が校門を出て、1人駅に向かって歩いていると、後ろから声をかけられたの。

「早乙女さん・・・」

振り向くと同じクラスの鹿島涼子さんだった。

「一緒に帰らない？」

「あ、うん」

「早乙女さん、ウチの学校もう慣れた？」

「う、うん。まあ慣れたと言えれば慣れたけど」

「変なところでしょ？」

「正直言うとね・・・。前に居た学校はもっと友達同士仲が良かったんだよね」

「この人達は周りが全部敵だと思ってるから」

「敵？ 何それ？」

「ウチは幼稚園から大学まで、エスカレーター式に進級できるけど、成績とか生活態度によって進めるコースが大きく変わってくるのよ。だから表面上は上手く交際しているように見えても実はお互いが敵対してるのよ」

「それって、何だか悲しい話だよね。せっかく受験戦争から逃れられたと思ったら、別の競争が待ってたって訳ね」

「そういう事。だから腹黒くなって上ばかり気にして・・・それから橘先輩はここの理事長一族の1人だからみんなが彼の言う事を聞くのよ」

「私を助けてくれた」

「うん。橘先輩は今のウチの状況を変えたいと思っているみたい。だから早乙女さんのようなケースは放っておけなかったのよ」

「何でそんなことまで知ってるの？」

「私の兄と橘先輩って親友同士なの。だからよくそういう話もするみたい」

「ふーん・・・でも、何で私にそんな事を教えてくれるの？」

「実は私もこんな状況が嫌でね。もしかしたら早乙女さんと仲良くなれるんじゃないかって思ってた」

「嬉しい！ 私ずっと友達が欲しかったの」

「それとね、ここの複雑怪奇なルールも教えてあげた方がいいと思って」

「助かるよ。よろしくお願いします」

真っ暗闇の中に立ちすくんでいたら突然光明がさして来たって感じだった。

やっぱり友達って必要だと思う。それも名ばかりの友じゃなくて親友ってやつ。

涼子さんだって幼稚園から橘学園に通っていた人だから私と比べて気品がある感じだけど、他の人、特にあのイヤミ女王なんかとは全く違う空気を持っている気がした。

「まず知っておいて欲しいのは女王様の存在よ」

「うんうん、知ってる。谷岡さんね」

「違う違う、3年の豪徳寺さんよ」

「ゴウトクジ？」

「豪徳寺紗枝子さん。あなただって豪徳寺財閥の名前は聞いたことがあるんじゃない？」

「名前だけは・・・」

「彼女はその豪徳寺財閥のご令嬢なの。そして橘理事長のお孫さんである橘先輩のお兄さんの健一さんの彼女なの」

「ひえ～、やっぱりご令嬢は御曹司とくつつくんだねえ、まるでドラマか映画のようだわね」

「それと、あまり大きな声では言えないけど・・・」

涼子さんは声を落として教えてくれた。

「豪徳寺さんはね・・・」

「豪徳寺さんは橘先輩にもご執心らしいの」

「えー？ 兄と弟の両方にチョッカイ出してるって訳？ 図々しい・・・」

「もちろん橘先輩の方は豪徳寺さんに距離を置いているみたいだけどね」

「そりゃそうだ。兄貴の彼女じゃね」

「それでも、事ある毎に橘先輩に絡んでいるみたいなの。橘先輩もホトホト困ってるって話よ」

「ギャフンと言わせてやりたくなるね」

「でも気をつけて、彼女を敵に廻したら大変よ」

「はーい」

「それからね・・・」

涼子さんは、その上品な外見からは想像出来ないくらいのお喋り好きだった。

やっぱり女の子はこうでなくっちゃね。私もお喋り好きでは負けてないし。

私達は駅までの道も電車の中でも話し続けた。

特に私はお喋りに飢えていたから、この時とばかりに話したけど涼子さんだって全然負けてない。

この人も長い間我慢してきたんだろうな・・・。

でも、おかげで随分と表や裏の情報を仕入れることが出来ちゃった。

それに短い時間だったけど、私達随分と打ち解けあうことが出来たの。

私には何よりそれが一番嬉しかった。

涼子さんと出会って、私は良家の子女に対する偏見が少しは軽くなったような気がする。涼子さんの家系だって、日本を代表するような有名企業の経営者一族なの。

実際のところ、お金持ちのお坊ちゃまやお嬢様って、ごく狭いテリトリーの中で固まっていて、外部の人を寄せ付けないような部分を感じられたのよね。

特に私みたいな普通の家の子なんて完全に仲間外れというか論外って感じ。

そういう意味で言うと、涼子さんはそこから抜け出てきて私と付き合い始めた訳だから、ある意味で上流階級の中の裏切り者みたいなものよね。

もちろん私にとっては、そういう裏切りなら大歓迎ってことなんだけどさ。

とにかく、転校して来て随分つまらない思いをしてきた日々にもやっとオサラバできると思うと、急に目の前が明るくなったような気がしたんだ。

やっぱり学園生活ってこうでなくちゃね！

女王様とお付

お昼休み、お弁当を忘れた私は近くのコンビニでサンドイッチと小さなペットボトルの紅茶を買って教室に戻る途中だった。

唐突に廊下で3年の女子に呼び止められた。

「ちょっと！」

「はい？」

「あなたね。仙台から来た子っていうのは」

「あっ、はい。早乙女といいます。よろしくお願いします」

言い終えて私はアッと息を飲んだ。

名札には豪徳寺紗枝子の文字。女王様の登場だ。

「健二君に少し優しくされたからってイイ気にならないでよね」

「そんな、誤解です」

「何よ、大して可愛くもないじゃない。健二君も物好きな人ね。あなたなんかには同情するなんて」

「同情・・・」

「彼は将来この学園の幹部になる人なんだから、あなたなんかとは格が違うの。それをわきまえなさい！」

「あの、何をおっしゃってるのか分かりませんが・・・」

「彼に近付かないでって言うてるの！」

「別に近付いてません」

「私に盾突く気！？」

私は猛然と反発心が湧いてきた。涼子さんには釘を刺されていたけど、こんな理不尽なことってある？

私は豪徳寺紗枝子を睨みつけると、反撃を開始しようとした。その時、

「申し訳ありません豪徳寺さん。この子、まだよく分かってなくて」

涼子さんだった。

いつの間にか私の後ろに来て、私の腕を掴むと引きずるようにその場を離れさせようとした。

「ちゃんと教えておきなさい！ こんな山猿のような娘が橘学園に居るなんて許せないわ！」

「こ、このっ！」

「駄目、早乙女さん、大人しくして！」

「だって、こいつ私のこと山猿って」

「まあ、こいつですって？ フンッ、先輩に向かって大した口の利きようね」

「本当に重ね重ねすみません、豪徳寺さん。ちゃんと話しておきますから」

「ちょっと涼子さん。引っ張らないでよ・・・」

涼さんは私が抵抗するのにも構わず、もの凄い力でその場から連れ出した。

「涼さんったら、私にも文句を言う権利くらいある筈でしょ？」

「言ったじゃない、早乙女さん。この学園で豪徳寺さんを敵に廻したら大変なことになるって」

「向こうがイチャモンつけてきたんだよ。私があいつに何かした訳じゃないんだから」

「分かってる・・・分かってるけど、相手の挑発に乗ったら負けなのよ」

「挑発？」

「きっと豪徳寺さんは、橘先輩があなたを助けてあげたことが気に食わないんだと思うの。だから先手を打って彼からあなたを引き離そうとしたのよ」

「そんなのってあり？ あいつには御曹司の彼氏が居るっていうのに」

「橘先輩が相手にしないから余計に癪に障るんだと思うの。だから早乙女さんを目の敵にしたんだわ」

「要するに嫉妬したって訳？　しょうもない女！」

「とにかく相手が悪すぎるから、今回は少し大人しくしてちょうだい」

「仕方ない・・・涼子さんがそう言うなら今回だけは我慢するよ」

ホントにハラワタが煮えくり返るっていうのはこの事だと思った。

大財閥のご令嬢だか何だか知らないけど、随分と了見の狭い女だよ。

だけど、涼子さんと仲良くなってからで良かった。

もしも1人ぼっちの頃だったら、このやり切れなさを分かってくれる相手も居なかった訳だし。

ホント、友達ってありがたいよね。

でも、事はこれで終わらなかったんだよね・・・。

それは休み時間にお手洗いへ行って、教室に戻る途中だった。

廊下で突然後ろから誰かに体当たりをされたの。

びっくりして振り返ったら3年の女子だった。

「あら、ごめんなさい。私ったら足がもつれてしまいましたの。オホホホッ！」

そしてその女は、ニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべながら離れていったの。

「まったく・・・気をつけやがれってんだ」

私は小声で呟くと、気を取り直して教室に戻った。

その後も何事も無く過ぎていったんだけど、放課後になって涼子さんが慌てて駆け寄ってきた。

「早乙女さん・・・」

涼子さんは私の背中に貼り付けられていた紙を剥がしてみせた。

その紙にはこう書いてあったの。

『私は東北の山猿でございます。エサを恵んでくださいませし』

私は驚いて涼子さんの顔を見た。そして周りにいた同級生達の顔も。

すると、ニヤニヤしていた男子2人が慌てて視線を逸らすと教室を出て行った。

「ごめんなさい。私がもう少し早く気が付いていたら良かったのに・・・」

「ちっくしょう、あの時の女だ！」

廊下で私にぶつかってきた女のニヤけた顔が目には浮かんだ。

「やっぱり始まってしまったわね」

「えっ？ 何が？」

「女王様には取り巻きが居るのよ。きっとその人達が嫌がらせを始めたのよ」

「お付の仕業って訳か・・・。しかし小学生並みのレベルだわね。バッカじゃないの？」

「気を付けてね。これからもこんな事があると思うから、出来るだけ1人にならないようにね」

「うん。ありがと」

この日、一緒に帰る涼子さんの表情は暗くて、とっても悲しそうだったわ。

まるで涼子さんがイジメに遭ってる人のようだった。

あんまり元気が無いから私の方が気を使っちゃって大変だった。

「ねえ、元気出しなよ。こんなの平気だからさ」

「ごめんなさいね、早乙女さん。こんな学校で」

「大丈夫だって。いざとなったら私ブッ飛ばしてやるからさ」

「駄目よ、暴力なんて」

「はいはい」

「私、情けなくて・・・」

「涼子さんのせいじゃないんだから、涼子さんが責任感ることないよ」

「私が守ってあげるつもりだったのに・・・」

「十分守られてるよ。涼子さんの心に」

「早乙女さん・・・」

男と女だったら、ここで抱き合っけてキスの1つも始まるんだろうけど。

この日はとうとう涼子さんの笑顔は見られず仕舞いだった。

強力な仲間

このところ、涼子さんは常に私のそばを離れなくなっていた。

どうやら私のことを本気で守り抜く決心をしたようだった。

育ちが良いからなのか、それともホントに人がイイのか、その気持ちは一途なほどだった。

もともと私としては涼子さんと一緒に居る時間が好きだったから、そうして涼子さんが私のそばに居てくれるのは好都合だったの。

涼子さんも意外と同じ気持ちだったかも。

教室の中では2人とも割と真面目な風を装っていたけど、放課後には互いの家に遊びに行ったりして、それは楽しいお付き合いが出来たと思う。

だけど悪い奴って、ホントに感心するくらい意地悪の種を見つけ出すのが上手いよね。

いつの間にか、私達2人に変な噂が立ち始めたの。

それは、

『ガールズ・ラブ』

ボーイズ・ラブなら聞いたことがあるけど、その女版って訳？

何でそうなるかなあ・・・。

どうせ噂の出所は女王様周辺だと思うけど。

しかも、3年の女子なんかは私達を見かけると露骨にエロい視線を投げつけてコソコソ話を始める始末。

私は別に気にしないけど涼子さんには気の毒だった。

私のせいで巻き添えを食った形になったんだもの。

彼女はこれまで人から中傷されたことなんて1度も無かっただろうから、根も葉もない噂を立てられるのは相当の苦痛だったと思うんだよね。

でも、私が涼子さんに少し離れようか？って提案したら、すごく悲しそうな顔をして否定したの。

どんなに噂を立てられても私と一緒に居たいんですって。

それって別に変な関係って訳じゃないよね。女同士って結構そういうことがあるもの。

別に恋愛感情って訳じゃなくて、単純に姉妹のような仲というか、肉親以上の仲というか。

言葉にするとかえって不自然になるけど、女の子なら誰だって経験あると思うんだよね。

そんなある日の帰り道の事だった。

私と涼子さんが並んでお喋りしながら駅に向かって歩いていたら、後ろの方から私達を呼び止めつつ走ってくる女子がいた。

「先輩！ 待ってー！」

何事かと、私は涼子さんと顔を見合わせた。だけど涼子さんはその女子が誰なのかすぐに分かったみたいだった。

立ち止まっている私達に追いつくと、その子は肩で息をしながら言ったの。

「先輩、私も仲間に入れて欲しいんです」

「恵美さん・・・」

「エミさん？ 涼子さん知ってるの、この子」

「橘先輩の妹さんよ」

「ゲッ！ 今度は妹？」

思わず、しげしげと彼女の全身を頭のとっぺんからつま先まで眺めてしまった。

小柄だけど、モデルさんみたいに可愛い顔をしている。ショートカットが良く似合う活発そうな女の子だった。

「兄貴から聞いたんです。お二人は橘学園で近年珍しい友情を育んでるって」

「ガールズ・ラブだけどいいの？」

「ちょっと早乙女さん」

「えへへ、ガールズの噂は聞いてます。大丈夫です」

何が大丈夫なんだ？ もしかしてこの子、本物のガールズ・ラブだったり？

「兄貴から話を聞いて、私すっごく頭に来たんです。兄貴が理想とするような学園生活を送っているお二人がこんな理不尽な目に遭うなんて」

「ああ、兄貴に派遣されて来たって訳か・・・」

「アイミー先輩、それは違いますよ。私が勝手に決めたんです」

「アイミー先輩・・・ちょっとその呼び方にはトラウマが・・・」

「あらいいじゃない。私も今日からアイミーって呼ぶことにするわ」

「涼子さんまで・・・」

「私のことは涼子って呼び捨てにしてね」

「それじゃ私のことは恵美って呼び捨てにしてください」

「そんなことしたら、また女王様達に吊るし上げられるよ」

「大丈夫ですよ。そこは私がバリヤーになります」

「バリヤー？」

「このグループに私が入れば、豪徳寺先輩達も手が出しづらくなるでしょ？」

「ふんふん・・・」

「アイミー先輩と涼子先輩は安心できるし、恵美は楽しい学園生活が送れるし、一挙両得ってことです」

「なーるほど・・・それなら仲間に入れてもらおうか涼子？」

「もちOK！ よろしくね恵美！」

「よろしく申し上げます先輩方！」

「よろしくエミ！ エへへへ、何だか急に青春っぽくなってきたなー」

恵美が本当に自分の意思で来たのか、それとも本当は裏で橘先輩が動いていたのかは分からないけど、どっちにしても悪い話じゃないよね。

それに、恵美と付き合い始めてすぐに分かったの。

恵美はとっても素直なイイ子だってことが。

「せっかくだから私達のグループに名前を付けませんか？」

「いいわね。どうするアイミー」

「だからそのアイミーっていうのは・・・まあいいか・・・それじゃあ・・・ウフフッ、『チームGL』ってのはどう？」

「GL？ チーム・ガールズ・ラブ・・・ってことですか？ アイミー先輩」

「まあ・・・随分とイヤミが利いてるわね。気に入ったわ、恵美はどう？」

「もちろん賛成！ どうせならチームのワッペンなんかも作りましょうか？」

「大賛成！」

もう完全にワルノリのチームGLなのであった。

もう梅雨の時期に入っていて、少し肌寒い日が続いていたけど、我らチームGLは相変わらず元気です！

それから、恵美が予想した通り、恵美が私達の仲間になった途端に、女王様の取り巻き達は私と涼子に手を出さなくなったの。

そうなればもうこっちのものだよな。

私達は、どこにでも3人揃って出掛けて行ったの。

映画やお買い物、勉強だって喫茶店や図書館で3人揃ってやったんだから。

日々、チームの結束が強まっていく感じね。

そしてそれが周りにも分かるのかもしれない。私達3人が楽しそうに絡んでいるのを羨ましそうな顔で見ている人達が居るのに私は気付いていたの。

そして、新たな加入希望者が現れた。しかも3人。

3人とも橘高校1年で、やはり幼稚園から橘学園育ちのお嬢様なんだけど、涼子や恵美とは一味違ったお嬢様達だったの。

佐久間加奈子。愛称カナ。長刀（なぎなた）の名手。

伊藤紀子。愛称ノリコ。空手二段。

大久保郁子。愛称イク。合気道初段。

つまり、この3人は文武両道タイプだった訳。

自他共に認めるチームGLのファイター達です。

アッという間に6人に増えたチームGLだけど、この分だとまだまだ増えそうな勢いだな。

そのうち橘学園を乗っ取ってしまうかも。

クククッ！ そうなったら傑作だわ。

そうそう。私達のチームスタジャンも作ったの。ショッキングピンクの派手なやつ。

さすがに校内では着られないけど、放課後に街にくり出す時に着たりするの。

もっとも、かなり目立つから余程気合が入った時だけなんだけど・・・。

そして、チームリーダーはもちろん私。

別に立候補した訳じゃないんだけど、成り行きってところかな？

それに、他の5人はお嬢様育ちだけど、私だけ普通の家庭に育っているから、少々下品な遊びも知ってるんだよね。

下品と言っても、例えばテイクアウトのハンバーガーを公園のベンチで食べたりすることも彼女達にとっては初体験だったのよ。

信じられる？

私はこんな環境に突然放り込まれた訳だから、そりゃ苦労するわよ。でも、チームGLによる校内環境最適化計画は着々と進行しているのです。

そんな風にして庶民の遊びを私からドンドン吸収して、彼女達は益々話せるイイ友達になってきました。

あっ、そうそう。今月、信じられない事件があったのよ。

橘学園短期大学の1年生がレイプされたんだって。なんか車に連れ込まれて乱暴されたみたい。

もう最悪って感じだよね。

私も気をつけよ・・・。

浮気

「こんにちは、アイミーちゃん！」

日曜の夕方、私は自宅の前で声をかけられた。

てっきり私は以前にメールをくれた3年生の誰かだとばかり思って、満面の笑みを浮かべて、声の方を振り向いた。

ところが、そこには外車のスポーツカーが停まっていて、運転席の窓から若い男性がこちらを見ていた。

「あの・・・どちらさまでしょうか？」

「あ、ごめんごめん。僕は橘健一といいます。健二の兄です」

優しそうな人だった。橘先輩の方は強い人ってイメージだけど、長男ってこういうものなのかな？

でも、こんな優しそうな人が、あの豪徳寺紗枝子と付き合って大丈夫なのかと心配になっちゃう。

尻に敷かれてそう・・・。

想像して、ついニヤニヤしちゃった私。

「どうしたの？ 何が可笑しいの？」

「あっ！ い、いえ、失礼しました。何でもありません・・・」

あーマズイよ。つい顔に出ちゃった。

しかし、この人は何をしに来たんだろう？

「今、忙しい？」

「いえ、別に・・・」

「それじゃ少し付き合ってくれない？」

「は、はい・・・」

私は誘われるままにお兄さんのスポーツカーの助手席に乗り込んだ。

しかし、さすが金持ちの車だわ。ウチの父さんの大衆車とは全然違うよ。

見るからに高級って感じがプンプンしてくる。シートだって本皮だし。

「これ素敵な車ですね。お兄さんは車がお好きなんですね」

「安物だよ。本当はもう2グレード上のが欲しかったんだけど、学生はこれで十分だって親父に言われちゃってね」

十分贅沢です。私はそう言ってやりたかったけど我慢した。

「ところで、私に何か？」

「いや、大した用事は無いんだけどね。最近噂のアイミーちゃんに1度会ってみたくてさ」

「えっ？ 大学の方にまで噂が？」

「届いてるよ。仙台から可愛くて元気のいい子がやって来たってね」

可愛い？ 何だかテレるなあ・・・。

これだけ言われて悪い気のする人なんて居ないよね。

私もついニコニコしちゃったの。

「アイミーちゃんって、彼氏は居るの？」

「いいえ、居ないんです。欲しいんですけど」

「それじゃ、僕が立候補しちゃおうかな？」

「えっ？」

おいおい・・・そんなこと言っているのかよ？

豪徳寺紗枝子の顔が脳裏を掠めた。

「あの・・・お兄さんは豪徳寺さんとお付き合いされてるって聞きましたけど」

「別に本気で付き合ってる訳じゃないよ。親同士が昔からの知り合いでね。俺と紗枝子も義理で婚約したようなもんさ」

婚約してんのかい！？

まったくこの男は・・・。

私は呆れて、思わず彼の横顔を穴が開くほど見つめてしまった。

「そんなに見つめられるとテレるなあ」

私は慌てて前を向いた。何故か顔が真っ赤になった。

「お近付きのしるしに、馴染みのホテルに寄って少し休んで行こうか？」

「は、はい、お任せいたします」

何だか私は舞い上がってしまって、冷静に物事が考えられなくなっていた。

もう少し冷静なら、彼の言葉を聞き逃す筈もなかったのに・・・。

間もなく車はホテルの敷地内に入った。ホテルはホテルでもラブホテルに。

「ちょ、ちょっと！」

「ん？ どしたの？」

「どしたの？じゃなくて、ここってラブホじゃないですか？」

「そうだよ。お近付きついでに気持ちイイことしてあげようかと思って」

「結構です！ 今すぐここから出てください！」

「えー・・・せっかく入ったのに」

「ぶっ飛ばすわよ！」

「わ、わかったよ」

橘健一の車は、結局ラブホテルの敷地の中を通り過ぎただけで市道に戻った。

まったく油断も隙もなかったもんじゃない。

私はプリプリ怒っていた。

「アイミーちゃん。ほんの冗談だから・・・」

「冗談にも程があります」

「ホントに申し訳ない。お詫びのしるしに・・・」

「もう『しるし』は結構です。何されるか分かったもんじゃない！」

「それじゃ、評判のケーキ屋で人気ナンバーワンのケーキをご馳走するから」

「結構です！」

私の剣幕があまりに強かったものだから、彼は恐れをなして私を家まで送り届けると、そのまま去って行った。

だが、翌朝登校すると学校は大変なことになっていたのである。

「ちょっとアイミー、どうなってるの？」

登校するや、涼子が怖い顔をして私を問い質す。

「へ？ 何が？」

「何がって、昨日の夕方のことよ！」

「昨日の夕方？ あっ」

「あ、じゃないわよ。どうしてそんなことしたの？」

「ご、誤解だよ涼子」

「だって、目撃した人が居るんだから」

「えっ？ 何を？」

「健一さんといかがわしい場所から出てくる所を携帯で証拠写真まで撮られてるのよ！」

「マジで？」

「やっぱりホントなの？」

「だから、誤解なんだってば。ちゃんと説明するからさ」

もう涼子は泣きそうな顔をしていた。

そして、いつの間にかチームGLのメンバー達も心配そうな表情で私のクラスの前に集合していた。

「・・・という訳なの」

私は昨日の出来事をメンバー達に出来るだけ詳細に説明した。

こういう時は些細なところで手を抜くと、後で深刻な誤解が生じる恐れがあるから、私は必死で思い出しながら出来るだけ正確に伝えたの。

話を聞いたチームGLメンバー達の表情がやっと緩んだ。いや正確に言うと恵美以外のメンバーが、だけど。

恵美は憤慨して、すぐに携帯で電話をかけた。

「あ、もしもし、健一兄さん？ ちょっと何てことしてくれたのよ！ もう最低の男だね！ 兄妹の縁を切りたいわ！」

最初からモノ凄い剣幕だ。恵美の携帯から健一の声が微かに洩れ聞こえてくる。妹に必死に謝っているのが聞こえる。

なんとも情けない兄貴である。これが将来の橘学園を背負って立つ人物かと思うと他人事ながら心配になってきた。

「とにかく兄さんが責任持って事態を收拾させてちょうだい。分かった？」

恵美は不機嫌そうに携帯を切った。

「アイミー先輩・・・ホントにごめんなさい。アホな兄貴のせいで・・・」

「いいのよ、恵美は気にしないで」

しょげている恵美を慰めながら、私は意外な程に早く決着したことに満足していたの。

これが以前の橘高校なら長期に亘る噂となっていたのであろう。チームGLの面目躍如といったところか。

私は一気に広まった噂がこれからどういう具合に収束されていくのかに興味があった。

だが、驚いたことに、その日の内に誰もこの噂を口にする者は居なくなってしまったのである。

たった1日で噂を消してしまう方法って何？

橘学園って、何だか伏魔殿のような気がしてきた。

トップの号令がかかると人の噂ですら1日で消してしまうことが出来るなんて。

私は何か恐ろしいモノを見せつけられたような思いだった。

怒りの矛先

恵美から聞いたところによると、健一さんは豪徳寺紗枝子から随分とお灸をすえられたらしい。

まあ当然だよな。

しかも婚約までしてるんなら立派な浮気だもん。

今回ばかりは私も豪徳寺さんの肩を持たざるを得ないって感じだよ。

私はいくらモテたって、こういうモテ方は御免。

全くふざけんじゃねえ！って感じ。

そうそう、そう言えば、ふざけんじゃねえ！って話がもう1つあるの。

7月に入って、またもや学園の人がレイプ事件に巻き込まれたの。今度は橘学園大学の3年生らしい。

こう連続して学園の女性が被害に遭うと、ホントに気持ちが悪いよね。

偶然か、それとも学園が狙われているのか？

まさか、健一さんじゃないよね？

もっとも、あれだけ昼行灯だったらレイプ犯なんてことはないか・・・。

その日、私は突然、豪徳寺紗枝子から呼び出しを受けた。

授業が終わって、チームGLで街にくり出そうとしていた矢先のことだった。

「何かしらね？ 女王様からアイミーにお詫びの言葉があるとか？」

「アイミー先輩、気をつけた方がいいかも・・・紗枝子さん最近気が立ってるようですから」

「いずれにしても、あまり関わり合いたくない人なんだよね・・・まあ仕方ないから行ってくるわ」

私は指定された場所である体育館の裏に行った。

そこには豪徳寺紗枝子とその取り巻きの5人の3年生が待っていた。

そして豪徳寺紗枝子は私の顔を見るなり不機嫌まる出しで言ったの。

「この売女（ばいた）！」

「売女？ 随分な言いがかりですね、先輩。あなたが自分の婚約者をしっかり見張ってないから、あの男はフラフラと他の女に手を出すんじゃないんですか？」

「何ですって！ あんたが彼を誘惑したからに決まってるでしょ！ 全く盗人猛々しいとはこのことよ」

「あんな情けない男、こっちの方から御免こうむります。それに私は横恋慕なんてしませんから、どうぞご安心ください」

「き——！！ この山猿・・・あんたなんかこの学園に居られなくしてやるから！ あんた達、やっておしまい！」

命令された取り巻き達が私の周りをグルリと取り囲んだ。

こいつらマジでやる気？

それならこっちにだって考えがあるよ。

自己流だけどケンカじゃ子供の頃から男にだって負けたこと無いんだから。

おっと、こいつら武器まで持参してやがったか。全員がゴルフのアイアンを構えてる。

素手を相手に平気で武器を使うこの神経。心の底まで腐ってるね。

猛然と正義のパワーが増してきたよ！ こいつら絶対生かして帰さない！

そして私は、私独特の構えを取った。必殺！ 蠶螂（かまきり）の構え！

お前ら全員、地獄行き決定だぜ！

そして今まさに取り巻きの1人がアイアンを振りかざして私に飛びかかろうとした時だった。

「はい、はい、そこまで」

ノンビリした声が決戦場に響いた。

声の方向を振り向くと、そこには橘先輩、見慣れない1人の3年男子、そしてチームGLのみんなが勢ぞろいしていた。

それを見ると、5人の取り巻き達は青くなって一斉に回れ右して一目散に逃げ出した。

そしてただ1人残った豪徳寺紗枝子は私を睨みつけて、その場に突っ立っていた。

橘先輩が相変わらずのノンビリ声で続ける。

「あー怖い怖い、女ってどうしてこう怖いのかねえ。兄貴も馬鹿だけど豪徳寺も相当の馬鹿と見た。やっぱり馬鹿は死ななきゃ治らない、ってか？」

「健二君、ひどい。私は被害者よ。この女が健一さんを誘惑したの。私は健一さんもこの女も許せない」

「早乙女、俺が悪かったのかもしれない。例のクッキー袋、兄貴にも渡しちゃったんだよ」

「ううん、私があの手紙に自宅住所まで書いたのがいけなかったんです」

「ほら、健二君、この女、今自分で白状したわよ。健一さんに住所を教えて誘惑したのよ！」

「違うっっちゃうの。早乙女はそんなことする女じゃねえよ」

「何でそんなことが言えるのよ。私のことは色メガネで見るのに何でこの山猿にはそこまで味方するの？」

「哀れな女だな。もう俺達の前から消えろよ」

「ひどいわ・・・」

豪徳寺紗枝子は、まるでドラマか何かでよくみる悲劇のヒロインのように泣きながら走り去った。

その余りのわざとらしさに一同は大いにシラケて、慥然として見送った。

「まあ、1番悪いのは健一兄さんだけだね」

恵美がポツリと言った。

「豪徳寺さんだって、二股かけてたんだから偉そうなこと言えないのにね」

涼子の一言に、みんなが苦笑した。

「涼子も早乙女君と付き合うようになってから、なかなか言うようになったな」

橘先輩と一緒に居た、初対面の3年男子が言った。

「エヘヘ、アイミーの教育がいいもので・・・あっそうだ、これ兄なの」

「これ？ ハハハ。初めまして、鹿島隆俊です。涼子がお世話になってます」

「あ、こちらこそよろしくお願いします。何だか私のせいで涼子の柄が悪くなったんじゃないかって心配してるんですけど」

「アッハッハ！ そんなことないさ。我が妹ながら最近は輝いて見えるよ。早乙女君のおかげだよ」

「橘先輩と兄がチームGLのアドバイザーになってくれるんだって」

「ホント？ うわーマジ嬉しい。ありがとうございます」

こうしてチームGLにまた新しい仲間が増えたの。

涼子のお兄さんも、涼子と同じで見るからにイイ人って感じ。

私、昔から兄貴が欲しかったんだけど隆俊さんはまさに兄貴ってイメージなんだよね。

でも、彼氏という感じではないな・・・やっぱり兄貴だよ。

彼氏なら・・・橘先輩？

やだ、私ったら何考えてんだろ・・・。

「アイミー、顔が赤いよ」

「えっ？」

「アイミー先輩、男に弱いとか？」

「そ、そんなことない！」

「ハハッ、そんなにムキになるなって。凶星ってバレちゃうぞ」

「やだーもー橘先輩ったら・・・」

こうしてチームGLに明るい笑顔が戻った。

ますます青春真っ只中って感じになってきた。

女同士もいいけど、やっぱり男子が加わると一味違うよね。

これで彼氏でも出来たら言う事無いんだけどな。

彼氏・・・か。

朗らかに笑っている橘先輩が眩しく見える。

でも、身分違いも甚だしいもんね。

本気で惚れないようにしないと痛い目に遭うな。

大丈夫か？ 私・・・。

急接近

橘先輩と隆俊さんは、チームGLのスタジャンを新調した。

私達と同じデザインだけど、色はブルー。

そして背中のチームロゴの下に少し小さな文字でアドバイザースタッフって英語で入ってるの。

何だか本格的な組織になってきた感じだよね。

最初は女同士の気まぐれから始まったのに。

でも、同じユニフォームを着た仲間達と一緒に居ると連帯感があって嬉しい。

せっかくだから、チームの正式なキックオフをやろうという話になって、日曜日にパーティーをすることになったの。

しかも・・・。

な、なんとパーティー会場は橘家の別荘で一す！

ビックリでしょ？

これじゃ、まるで橘学園公認チームって感じだよ。

私、責任感じてきちゃったなあ・・・。

橘家の別荘は私達の住む町から電車で2時間くらいの海沿いの別荘地にあるの。

私はてっきり電車で行くものだと思ってたんだけど違った。

みんな、運転手付きの自分の家の車で行くんだって。

ゲゲッ！　と言う事は、私だけ電車？

やっぱり金持ちは違うなと少し寂しい気持ちだった。

そんな時、橘先輩がビックリするようなことを提案したの。

「みんなは家の車で行くんだろ？　アイミーはどうする？」

「私は・・・電車で」

「俺のバイクで行こう」

「へ？」

「リーダーは俺が責任を持って送り迎えするよ」

「うっそ・・・」

「お兄さん、コケてアイミー先輩に怪我させないでちょうだいよ」

「大丈夫！　任せとけ！」

なにになに？　橘先輩自ら私を送り迎えしてくれるって言うの？

マジ？

日曜の朝の私は、もう大変な大騒ぎだったの。

いつもより2時間も早く起きてお風呂に入って、髪も綺麗にセットして、柄にも無くコロンなんか付けたりして。

寝ぼけまなこの翔太が私のそんな様子を目を丸くして見ていたくらい、私は乙女チックで慌しい朝を過ごしていたの。

橘先輩が迎えに来るのは午前9時。もう間も無く。

焦りまくってお洋服を選んでいたけど、なかなか決まらないよ。

みんな正装で来るのかな？

私だけ場違いな普段着で行ける訳ないし・・・どうしよう・・・。

もう一張羅のワンピースでも着るしかないか。

でも、これで大丈夫か？

私にとっては一張羅でも、金持ちから見たらみすぼらしい格好に見えるかも。

ウジウジと迷っていたら、父さんが私を呼んだ。

「愛美！ お迎えだぞ！」

「あっ、ハイ。すぐ行くから！」

えーい、仕方ない。このワンピースで行こう。

私は大急ぎで着替えた。

玄関を出る前に、鏡を覗き込んで最終チェック。

うん、大丈夫。意外と可愛いじゃん！

自画自賛。

玄関の扉を開けて外に出ると家の前に橘先輩が待っていた。

「橘先輩、お、おはようございます」

「おはよう・・・って言うかお前・・・」

橘先輩が絶句してる！

なになに？

私、何か間違った？

「お前、何て格好してるんだよ・・・可愛いけど」

「えっ？ これじゃ駄目ですか？」

アチャー・・・やっぱり金持ちの趣味じゃないか。

激しく落ち込む私。

「これからバイクに乗るっていうのに、そんなヒラヒラした服着てたらパンツ丸見えだぞ」

「えっ？」

なるほど橘先輩はチームのスタジャンにジーンズ姿。

手には2つのフルフェイスヘルメットを持ってる。

「お前も俺みたいな格好に着替えて来い。もちろんチームスタジャンは必須アイテムだぞ！」

「は、はい。今すぐに！」

私は居酒屋の店員みたいな間抜けな返事をするとう慌てて自分の部屋に戻った。

あー、ビックリした。

そっか、バイクだった。

それじゃ、いつもの普段着でいいのか。

ちょっと気が楽になった。

でも、せっかく橘先輩と2人きりになれるんだから可愛い格好したかったな。

そう言えばさっき……。

『お前、何て格好してるんだよ……可愛いけど』

可愛いけど？ 橘先輩が私のこと見て可愛いって言った？

うっそ————！！！！

やっぱり普段着はヤメ。

私はクローゼットを引っ掻き回してベストアイテムを探した。

よし、決めた！

本日の勝負服はこれ！

体にピッタリのVネックTシャツ。色はモカブラウンのシックなやつ。

自分で買ったのに、こんな大人っぽい服、いつ着るんだらうって悩んでたの。

でも、これこそ今日のような日に相応しいよ。

それと、下はスリムなブルージーンズだな。

うん、この取り合わせ、結構決まってる。

全身が映る鏡の前で、私は2度3度ターンをしてチェックした。

翔太の奴が不思議そうな顔して見てる。

「翔太はあっち行け！ シッ！シッ！」

「ひでーよ姉ちゃん。犬みたいに・・・」

うるさいよ、姉は必死なのだ。あんたに見せるために悩んでいる訳じゃない。

よし！ OK！

いざ出陣！

今度は何て言ってくれるかな？

私は恐る恐る橘先輩の顔色を窺った。

ニコニコしてる。やった大成功！

「お前さ」

「はい！」

「人の話、聞いてた？ スタジャンどうしたんだよ」

「あ・・・忘れた」

もー・・・ドジ！ドジ！

再度部屋に戻るとスタジャンを取って橘先輩の元へダッシュ！

「よーし、それじゃ行こうか」

「はい、よろしくお願いします」

私は橘先輩に続いてバイクのタンDEM席に乗った。

眩しい風景

私達は海を目指して走り出した。

私、バイクに乗るの生まれて初めてだったから、最初のうちは少し恐かったの。

でも、橘先輩の背中にピッタリとくっ付いて、私とっても幸せな気分だった。じんわりと橘先輩の体温が伝わってくる。

なかなか心臓のドキドキが治まらない。

だって、私達こんなに密着してるんだもん。

公衆の面前でこんな風に大胆に抱きつけるなんてバイクならではの特権かも。

それでも少し経つと、私もようやくバイクに慣れて周りを流れる景色を眺める余裕が出てきたの。

梅雨明け。

7月終わりの強烈な太陽の日差しが燦燦と降り注いでいる。

爽やかな暑さ。そして全身を撫でていく風。

心地よいバイクの振動。

流れる町並みも、いつもとどこか違って見える。

全ての物が輝いてる。

車とは全然違う感覚に私は夢中になっていたの。

しかも、橘先輩と私の2人だけの時間。

この時間が永遠に続いて欲しいと願わずにはいられなかった。

気を失いそうな位の嬉しさでバイクから転がり落ちないように、私はまたしっかりと橘先輩の背中に体を寄せた。

「少し休もうぜ」

バイクは高速道路のサービスエリアに入っていった。

日曜のサービスエリアは混んでいたけど、バイクなら駐車スペースには事欠かない。

私達は自販機の近くにバイクを停めた。

「ちょっと待ってな」

橘先輩はバイクを降りると自販機で缶ジュースを2本買ってきて私に1本を渡した。

「すみません・・・」

「リーダーのご機嫌を取っておかないとな。ハハハ」

私達は近くのベンチに並んで腰掛けた。

「疲れたろ？」

「ううん、平気です」

「お前、凄く抱きつくからオッパイが気になって仕方なかったよ」

「や、やだ、先輩ったら」

「おっ、赤くなった」

「恥ずかしい・・・」

「お前さ、最初会った時には何だか萎縮してるように感じたんだけど、最近はホントに元気になったよ」

「図々しいので・・・」

「アハハッ！ それくらいでないとウチの学園じゃやっていけないからな」

「橘先輩・・・どうして私にこんなに良くしてくださるんですか？」

「お前のことが気に入ったからさ」

「えっ？」

「お前のその天真爛漫な感じが凄く気に入った」

「天真爛漫ですか・・・」

「ウチの奴らは何だか知らないけど暗くてウジウジしたのが多すぎる。豪徳寺なんてその最たるものだ」

「はあ・・・」

「そんな学園にお前が風穴を開けてくれたんだよ」

「それって・・・学園の破壊者って感じでしょうか？」

「ハハハッ！ 破壊者って言えば破壊者かな？ でも今の学園は1度破壊しないと再建できないよ。お前ならそれが出来る」

「私なんて、そんな力はないですよ・・・」

「得意の螻蛄（かまきり）拳法で頼むよ」

「あーん・・・先輩の意地悪・・・」

「それに・・・俺は」

「はい？」

「い、いや、何でもない」

「あっ、気持ちわるーい」

「アハハッ！ まあそのうちな。そろそろ行こうか」

あー、気になる。

橘先輩は今、何を言いかけたの？

私のこと？

私を認めてくれたのは分かったけど、それだけ？

それとも、もっと期待していいの？

橘先輩、私、これでも女ですから。

もっと女扱いして・・・。

お願い。

そんな私の気持ちも知らずに橘先輩はバイクのエンジンを始動させた。

バイクは高速道路を下りて一般道に入った。

周りは緑が眩しい山間で、どこか懐かしい草の香りが風に混じっていた。

そう言えば仙台に居た頃はこんな草の匂いってどこにだってあったっけ。

東京って、それが無いから寂しいよな・・・。

やっぱり私は田舎者ってことか。

そんなことを考えていたら突然目の前の景色が開けたの。

海だ！

とうとう海辺の町に辿り着いたんだ。

ということは・・・もうそろそろ橘先輩と2人きりの時間も終わってしまう。

あーん、何だか物足りないよ。

もっと一緒に走りたい。

何だか橘先輩が近く感じられるようになって、私は少し我が儘になっていたのかもしれない。

国道から別荘に続くワインディングロードを、バイクを右に左に傾けながら運転する橘先輩の背中に、私は一層強く胸を押し付けた。

青い海

間も無く私達は橘家の別荘に到着した。

その別荘の前には国産や外国の高級車が何台も並んでいる。

私は呆気に取られてそれを見ていた。

しかも、もっと驚くのは、この別荘の広さ。

私の家の優に3倍はあろうかと思うほどの広さだ。

マジ？

バイクを降りた私達を見つけた恵美が大声で叫んだ。

「おそーい！ 2人でどこ道草してたんですか！」

「ごめん」

「悪い悪い、だってこいつが俺を誘惑するから」

私は思っきり橘先輩の脇腹をつねった。

「イテテッ！ 冗談だってば・・・」

「あーら、お熱いこと」

涼子もニヤニヤしながら出迎える。

カナ、ノリコ、イクのファイタートリオも待ちかねた様子で騒いでいる。

「せんぱーい、早く海に行きましょうよー！」

別荘の目の前はプライベートビーチになっていた。

白い砂浜が目眩しい。

入り江になっているから波も穏やかで、海水浴には絶好のロケーションだった。

私の水着は涼子が一足先に涼子の車で運んでくれたの。

昨日の帰り、涼子と2人で買ったお揃いのビキニ。

涼子は恥ずかしかったけど私が強引に決めちゃった。

露出度満点の超セクシー系だよ。

私と涼子が浜辺で水着姿になったら、橘先輩も隆俊さんも目を丸くしてビックリしてた。

他の女の子たちもビキニだったけど、私達2人の水着を見て羨ましがることしきりだった。

「さあ、海に入ろうよ！」

私の合図を待ちかねたように全員が嬌声を上げて海に飛び込んだ！

気持ちいい！

超サイコー！

私は波間に浮かんで真っ青な夏空を見上げた。

透き通るような蒼空。

遙か彼方には入道雲が見えている。

甘い潮の香り。

遠くにカモメの鳴き声が聞こえる。

こんなに気分良いの久しぶりだ・・・。

海に浮かびながら、ボケーっと空を見上げていた私の耳に何かの音が近付いてきた。

顔を上げてみると、ジェットスキーが近付いてくる。

操縦者は隆俊さんだ。タンデム席には恵美が乗っている。

「アイミーせんぱーい！」

恵美は楽しそうに手を振っている。

もう1台のジェットスキーが近付いてくる。こちらの操縦者は橘先輩だった。

しかも、その後ろに何かを引っ張っている。

よく見るとそれはバナナボートだった。

「みんな乗れよ。俺が引っ張ってやるから！」

みんな大喜びだ。

さすがに金持ちのレジャーは凄いわ・・・。

もう私は感心するしかなかった。

さっそく女性陣が全員バナナボートに跨った。

私を先頭に、涼子、恵美、カナ、ノリコ、イクの順だった。

「準備はいいかい？ それじゃスタートするよ！」

橘先輩はゆっくりと発進した。隆俊さんも並走している。

バナナボートって初めて乗るけど、掴まる所があまり無くて不安定なの。

しかも波を乗り越える時にバウンドするから落ちないように必死でしがみ付いていないといけない。

私達女性陣はもう最初からキャーキャーとウルサイ、ウルサイ。

橘先輩は時々後ろを振り返りながら、ニヤニヤ笑っていたが、次第にスピードを上げていった。

ちょ、ちょっと……。

これってヤバくね？

お、落ちそうだよ。

私達はもう絶叫してた。

そんな中で橘先輩は突然ターンを開始したものだから堪らない。

私達はそのまま旋回の外側に放り出されるような格好で海にナダレ落ちたの。

その時の悲鳴ときたらなかった。後から思い出しても赤面モノだよ。

「ひえ～～～！」だって……情けない。

だけど、1度落ちてしまうと諦めがつくというか、かえって海に投げ出される瞬間のスリルが楽しくて、その後も何度も何度も乗っては落ち、乗っては落ちを繰り返し楽しんだの。

それが終わると橘先輩と隆俊さんが、私達を1人ずつタンDEM席に乗せて水上ツアーリング。

その後はビーチバレー。

ホント、楽しかった。

それこそアツと言う間に3時間が経ってたの。

別荘から管理人さんが呼びに来るまで、私達は夢中で遊んでた。

たっぷり遊んで別荘に戻ると、もう午後3時。

敷地内にはイイ匂いがたちこめて、お腹がグーっとならなかつた。

いよいよパーティーの始まりだよ！

しかし、その料理を見て驚いたのなんの。

このご馳走は何？

こんなの見たことないよ。

バーベキューにオードブルにパスタにパンにサラダにスープに・・・。

もう盛り沢山。

ポテチにピザにコーラ、なんていう庶民のパーティーしか知らない私は、ここでも異次元の世界を思い知らされたわ。

しかも、専属シェフまで居るじゃない。

もう信じられない。

キックオフパーティー

シャワーを浴びて着替えてからパーティー会場に戻ったら、橘先輩が口火を切ったの。

「さあ、それじゃパーティーに先立って、我らがリーダー早乙女アイミーに一言頂きましょう！」

盛大な拍手の嵐。チームメンバーだけじゃなくて、別荘の管理人さんやシェフ、そして運転手さん達までが満面の笑みで私を見てる。

アタタタ・・・急に胃が痛くなってきたよ。

こんな人前でスピーチなんてしたことないし。

でも、仕方ない。

「おほんっ、えー・・・と皆さん！」

「いよっ！待ってました！大統領！」

「ちょっと茶化さないでよ健二兄さん！」

「お、失敬、失敬」

「アハッ・・・えっと、最初3人で始まったチームGLだけど、アッと言う間に8人になりました。何が出来るって訳じゃないけど、高校生らしく楽しい学園生活を送れるよう、みんなで力を合わせて行きましょうね。これからもよろしくお願いします」

「それじゃ、もう1人の発起人である涼子ちゃんに乾杯のご発声を」

「えっ？ 私？ じゃ、えっと、みなさん、これからもよろしく。乾杯！」

こうして私達のキックオフパーティーは始まったの。

腹ペコの私達は乙女の恥じらいも忘れてご馳走に夢中になったの。

こんな時は金持ちも貧乏人も関係無しね。

でも、ホントに美味しい料理だった。

こんなの生まれて初めてかもしれないよ。

ふと気が付いたらBGMにジャズが流れてたの。

ふーん・・・金持ちのパーティーはカラオケじゃないんだ。

さすがに高校生だからお酒は無いけど、この雰囲気の中に居るだけで酔っ払いそうな気分だよ。

しばらくして隆俊さんのピアノ伴奏で涼子がフルートの演奏を披露してくれた。

涼子がフルートを勉強してたのは聞いてたけど、こうして目の前で演奏を聴くとマジで上手いなあ。

隆俊さんの伴奏もさりげなくてカッコイイし。

芸があるっていいなあ。

私なんてハーモニカだって吹けないよ・・・。

その後、管理人さんもピアノで外国のナンバーを演奏して盛り上げてくれたの。

やっぱり庶民とはケタが違う。

庶民の悲しさを感じ始めていた私に涼子が話しかけてきた。

「ねえ、橘先輩とのデートはどうだった？」

「デート？ 何のこと？」

「バイクデートよ」

「あれってデートなの？」

「私と兄が画策して実現したんだから感謝してよね」

「えっ？ そうなの？」

涼子が含み笑いをすると橘先輩の方を見て言った。

「ほら、橘先輩、今1人だよ。行ってきなさいよ」

「え、う、うん……」

私は涼子に促されて、おずおずと橘先輩に近付いて行ったの。

「橘先輩……」

「ん？ ああ、どう？ 楽しんでる？」

「はい、もちろんです。何だか別世界に来たみたい」

「アハハッ！ 別世界か。確かに高校生のパーティーにしちゃ大袈裟過ぎたかもしれないな」

「でも、こんなにご馳走が出てきて私お勘定が心配になってきちゃた」

「それなら心配ご無用。今日の勘定は全部兄貴持ちだからさ」

「えっ？ 健一さんの？」

「そういうこと。この間のお詫びのしるしだっさ」

「また『しるし』か」

「えっ？ しるしがどうかしたの？」

「ううん、何でもない」

まあ、お詫びのしるしなら勘弁してやるか。

それに、健一さんのお蔭でこうして橘先輩とお近づきになれたのかもしれないしね。

うん、いいように考えることにしよう。

「何か飲むか？」

「はい・・・それじゃウーロン茶を」

「ちょっと待ってな、持ってきてやるよ」

嬉しかった。

橘先輩をこんなに近く感じられることが本当に嬉しかった。

楽しいパーティーはもうすぐ終わっちゃうけど、今日は本当に充実してたな。

帰るのがもったいないよ。

てか、帰りたくない・・・。

「それじゃ、宴もたけなわですが、そろそろ時間も時間ですから、最後にアイミーから今後の決意披瀝をしてもらいましょう」

「えー・・・またですか橘先輩」

「そりゃそうだよ。今日の主役はアイミーなんだからさ、ここでビシッと締めてもらわないとね」

「はい・・・えっと、偉そうなことは何も言えません。ただこれからもみんな仲良くやっていきましょうね。今日の主役は私じゃなくてみなさんです。私、みなさんと出会えてホントに良かった。これからもよろしくお願いします」

みんなニコニコしてた。

名残惜しそうに、それでも笑顔で拍手をしてた。

何故だか、ちょっとだけ涙が出た。

いいパーティーだった。

ご馳走の山も、メンバーやスタッフ達のお腹に収まって完食でした。

そう言えば、後片付けをしようとして管理人さんから止められちゃった。それはスタッフの仕事なんですよって。

うーん・・・やっぱり金持ちは違う。

宴の後

もう日も傾いてきた。

私と橘先輩は別荘の前でみんなを見送ったの。

みんな嬉しそうに、そして少し寂しそうに私達に手を振って行ってしまった。

また明日になれば会えるのに、何だか無性に寂しかった。

高級車が次々と走り去るのを見送るのは不思議な感じがするものだね。

そんなの普通は経験できないもの。

その時、何だか私もお嬢様の仲間入りしたような錯覚に陥っていたの。

もちろんそんな気のせいなんだけど・・・。

宴が終わると私は元の一般人に逆戻り。

これがシンデレラなら最後に王子様が迎えに来てくれるのにな。

「そろそろ俺達も帰るとするか」

「はい・・・」

そして私はまたタンデムで橘先輩の背中にしがみ付いた。

「ちょっとだけ寄り道してもいいか？」

「あ、はい・・・」

橘先輩は国道を外れて両脇が林になった細い脇道に入った。

空がオレンジ色に変わるのに合わせて、周りの風景もセピア色に染まっていった。

それが私の寂しさを増幅させて、その時の私は少しセンチな気分になっていたの。

私達は少し暗くなった細道をバイクで駆け上がって行った。

やがて私達は林を抜けて岬の突端に辿り着いた。

そこは・・・。

もう言葉が見つからない。

橘先輩の寄り道ってこれだったのね。

それは、

今まさに海に沈みゆくようにしている夕陽。

その大きな、そして真っ赤な太陽は私の心を一瞬のうちに掴んでしまった。

波に反射するオレンジ色の光たちが私達2人を包み込むようで、私は身じろぎもせずにそれを見つめた。

自然に、本当に自然に橘先輩の背中にもたれかかって私はただ虚ろにその夕陽を見送っていたの。

やがて夕陽が完全に水平線の彼方に沈み、夕闇が迫ってきていた。

そして橘先輩はやっと口を開いた。

「この夕陽、ぜひお前にも見せたかったんだ」

「こんな綺麗な夕陽を見たの初めて・・・」

「今日のは特別に綺麗だったな。この場所は俺のお気に入りなんだ」

「よく来るんですか？」

「いや、特別な気分の時だけかな」

「特別？」

「嬉しい時、悲しい時、寂しい時・・・何か感情の整理をつけたい時に」

「今日はどんな気分？」

「最高・・・そんな気分」

「よかった・・・」

「ん？」

「最高の時に私が一緒に居られて」

「お前が居たから・・・」

「えっ？」

「あ、いや何でもなし。さあ遅くならないうちに帰ろうか」

もう！ 肝心なとこだったのに・・・。

橘先輩のバカ！

夜の高速道路って不思議な場所ね。

暗い中に道路だけが明るく浮かび上がっている。

そしてその上を沢山のヘッドライトやテールランプがまるで生き物のように流れていく。

橘先輩の背中越しにその光の乱舞を見つめていたら、何だか幻想の世界に引き込まれそうな気分だった。

夜風が気持ちいい。

そして橘先輩の体温が私の胸に伝わってくる。

私達、今1つになってる。

夜の闇の中で1つに溶け合って、光の洪水の中を彷徨っている。

こんな不思議な場所は他にないよ。

ずっと、ずっと、このまま走り続けていたい。

橘先輩と一緒に・・・。

不穏な空気

パーティーの夜以来、私は何となく気分が晴れなかった。

あの幻想的な光に満ちた夜の高速道路。

全身に感じる風の愛撫。

そして胸のときめき。

思い出だけで顔が火照ってくる。

橘先輩の体温がまだ私の胸に残っていて、すごく切ない気分。

やばいよ・・・。

私、橘先輩のことが好きになっちゃったみたい。

夏休みに入ってもう1週間経つけど、橘先輩には会えないまま。

チームGLのメンバー達のほとんどは家族で海外に行っちゃってるし、微かな期待を持って学校に行ってみても閑散としてる。

何でこのタイミングで夏休みに入っちゃうんだよ。

寂しいじゃないかよー。

家に居ても何だか虚しい気持ちになるだけ。

かといって外出する気も起きないし。

あんまり暇だから普段読まない新聞なんか読み出したりして。

なにになに・・・。

うそっ!?

『3日午後8時ごろ、市内の私立高校3年の女性が何者かに暴行を受ける事件が発生した。女性の証言から犯人は目出し帽を被った20歳代らしい男性と見られ、犯行に使われたのは白いセダンであることが判明、現在警視庁では全力をあげて犯人の行方を追っている。』

また起きたんだ。これで3ヶ月連続だ。

市内の私立高校って言ったらウチともう2つあるけど今度はどこなんだろう？

いずれにしても、この町には恐ろしい連続レイプ魔が居るってことだよな。

気持ち悪い……。

こりゃ白い車を見たらご用心だな。それと夜1人で出歩かないようにしよう。

私の想像の中で犯人の顔がモンタージュのように切り替わっていく。

いの一番は健一さん。やっぱりって感じ。その次にクラスの男子達の顔が次々と浮かんだ。でも彼らは20代じゃないしな。

その次に浮かんだのは、なんと岡島先生。我が校で唯一の20代男性教諭だからかな？ でもこれはミスキャストだよな。絶対あり得ない。

うーん……そう考えると私って20代の知り合いが居ないんだなあ。もう打ち止めか。

こんなくだらない事を考えていたら、クラブ活動から帰った翔太が部屋に来て鼻息荒く言ったの。

「姉ちゃん。昨夜、橘高校の3年生がレイプされたんだってさ。知ってる？」

「マジで？」

「今日はウチのサッカー一部の連中がこの噂で持ちきりだったよ」

「ホントにウチの高校？」

「うん、間違いないよ。だって被害者の弟が同じサッカー一部だもん。そいつの親友が言うには、今朝そいつが泣きながら、絶対犯人を見つけ出して殺してやるって言ってたらしいよ」

「可哀想・・・犯人は絶対に死刑だよ！」

「姉ちゃんも一応は女だから気をつけろよ」

「へえへえ」

また橘学園の子か。こりゃマジで何かありそうだわ。

偶然にしては続き過ぎだもんね。警戒警報を出した方が良いかもしれないな。

チームGL出動かな？

アチャ、駄目だ。みんな海外に行ってるんだった。

もう・・・ホントにタイミングが悪いよなあ。

私1人でもパトロールしようかしら。

もしそれで私が襲われたら。

ブルブルッ！

怖いから止めとこ。

夜。

私は真っ暗な夜道を1人で歩いていたの。

なんで1人で歩いてるんだろ？

それにここはどこよ？

近くに人家もないし、人工的な灯りも見えない。

夜道を照らしているのは月の光だけ。

心細いなあ……。

この道はどこに続いているんだろ？

私はトボトボと歩き続けていた。

ふと気が付くと、私の足音の他にも誰かの足音が聞こえる。

最初はそら耳だと思ったんだけど、次第にハッキリと聞こえてきたの。

誰かが私の後ろから近付いてくる。

何だか急に恐ろしくなってきた、私は足早に歩き出した。

ところが、後ろの誰かも私を追いかけるように早足になる。

怖いよ！

とうとう私は全力で駆け出した。

誰かの足音はもう私のすぐ真後ろまで迫っていた。

「誰か、誰か助けて！」

「姉ちゃん！ 姉ちゃんったら！」

翔太に揺り起こされた。

「何が助けてー！ だよ。夢見て寝小便たれてんじゃねーよ！」

「えっ？ 寝小便？」

慌てて股間をまさぐった。

別に濡れてない。

寝ぼけまなこで翔太を見たら、翔太のクソ野郎は腹を抱えて床を転げまわって笑っている。

「こ、この野郎・・・だましたわね！」

「ね、ね、姉ちゃん、ま、股を、ヒヒヒッ、だまされて、アハハハッ、寝小便たれたと、ウヒヒヒッ、お、思っただろ？ ギャーハハハハッ！」

ビシッ！

私の蠅螂（かまきり）拳法が火を噴き、翔太は一瞬のうちに昇天した。

「ひでーよ・・・せっかく・・・橘・・・さんの・・・伝言を・・・ガクッ！」

「なぬ？ 橘さん？ 橘先輩のこと？ こら！ 翔太！ まだ死ぬな！ ちゃんと伝言を伝えてから死になさい！」

ゾンビとなった翔太が言うには、橘先輩から私に電話があったとのことだった。

携帯を見てみると、確かに着信ありだ。相手は橘先輩だった。

携帯に出ないから家の電話にかけ直してくれたんだ。

と言う事は緊急事態？

なおも翔太を問い詰めたらアホ翔太は私が午後のお昼寝をしたことを橘先輩にそのまま伝えたいらしい。

私はダメ押しの回し蹴りで翔太をふっ飛ばすと、慌てて橘先輩の携帯にメールを送った。

『お電話に出れなくてごめんなさい。何かありましたか？』

とりあえず短くても私が起きてることが伝わればそれでいいや。

じれったい思いで待っていたら携帯が着信した。

急いで通話ボタンを押す。

「はい、早乙女です」

「おはよう」

「お、おはよう・・・ございます・・・」

「寝小便は大丈夫か？」

「はい？」

翔太の野郎・・・絶対に殺す！

「お前の弟って面白い奴だな。今度会わせてくれよ」

「あ、いえ、その、あんなのに会ったらアホがうつりますから会わない方が身のためかと・・・」

「アハッ！ まあいいや。そのうち会えるだろうし。ところでお前、今日暇？」

「は、はい。もう暇で暇で困ってたところです」

「今からちょっと俺んちに来ないか？」

やった！ 待ちに待ったお誘いだ！

「はい、行きます！ 行きますとも」

「じゃ、迎えに行くよ」

「はい！」

やった！ やった！ やった！ やった！ やった！

なんて良い日なの？

幸福って、突然やってくるものなのね。

さてと、こうしては居られない。

私はいそいそとお出掛けの準備を始めた。

死体になった翔太が私を見上げてニタニタ笑っていたから、首を絞めてトドメをさしてあげた。

重大任務

今日は遠出じゃないから少しぐらい軽装でも良いよね。

今日こそは可愛さバリバリにアピールしたいもん。

えっと・・・上は白とオレンジの2枚のタンクトップを重ね着してと。

下はどうしようかな？

ホントはミニスカートにしたいんだけど、バイクだと無理か・・・。

それじゃあ、これ。カーキ色のカーゴパンツ。

うん、よし。これにこのシルバーの細身のベルトをこうやってウエストに巻いてと・・・これでどうだ！

死体がパチパチと手を叩いてる。

ふん！ あんたなんかに褒められても全然嬉しくないわ。

て言うか、あんた、ずっとそこで私の着替えを見てた訳？

「このドスケベ！ あっち行け！」

「ちえっ、減るもんじゃなし。このドケチ女！」

ドロップキックで変態翔太を部屋から蹴り出す。

それから鏡でしっかり全身チェック。

うん、いける！

あとは髪の毛とお顔の手入れのみ。

真剣に鏡を覗き込む私。

「姉ちゃん」

「うるさい！」

「あのさ」

「覗くな変態！」

「コロンなんて付けるのかよ？」

「ふん！ 黙れ！」

「あーあ、無駄な努力しちゃって」

「あんたホントに殺すよ」

「そんなこと言っちゃっていいのかな？」

「何よ？」

「こちらにおわすお方をどなたと心得るか！」

「はあ？」

あんまり翔太がしつこく絡むから、そっちを向いてみて、私は卒倒しそうになった。

「ようっ！ お邪魔してるよ！」

「橘先輩！」

翔太の奴！・・・後で覚えてろよ！

「あんまり橘さんを待たせるなよ。それじゃ橘さん、姉貴をよろしく」

「ああ、確かに預かった」

嗚呼・・・神様！

「橘先輩、早く行きましょうよ・・・」

翔太とじゃれ合っている橘先輩を急かして私が先に玄関を出た。

でも、玄関先に停めてある筈のバイクが無い。

橘先輩、まさか歩いて来たのかしら？

橘先輩がやっと出てきた。

「それじゃ、行くか」

「行くかって、バイクで来なかったんですか？」

「うん・・・まあ俺に付いて来な」

橘先輩の後に付いて50m程も歩いただろうか。

橘先輩はコイン駐車場に入っていく。

そしてそのうちの1台のドアロックを解除した。

「えー！？ まさか橘先輩、車の免許取ったの？」

「えへへ、そういうこと。今年は海外旅行にも行かずに教習所に通ったんだぜ」

「すごーい・・・これ先輩の愛車？」

「親父のだよ。今日はちょっと拝借してきた」

それは高校生には似つかわしくないドイツ製の超高級セダンだった。

その前後に貼ってある初心者マークがまるでギャグのようだ。

助手席に収まった私は、少しドキドキしながら橘先輩の様子を眺めていた。

橘先輩はとても免許取り立てとは思えぬ程の手馴れた様子でエンジンを始動した。

そして、私のウチの車と比べたらまるで戦車ほどにも感じるような大きな車を軽やかに発進させた。

橘先輩は、いかにも楽しそうという感じでハンドルを握っていた。

「どうだい？ 上手いもんだろ？」

「まあまあかな？」

「あっ！ こいつめ！」

私は何だか恋人同士でドライブでもしているような錯覚に陥っていた。

バイクも良いけど車も良いものね。でも車で来るって分かってたら、可愛いミニスカートはいてきたのに。

これからは、予めどっちで来るのか聞いてからお洋服を決めることにしよう。

でも、さすがに高級車だけあって乗り心地は満点である。シートも固めだけど体をしっかりとホールドしてくれて安心感があった。

私達2人を乗せた高級車は見慣れた街並みの中をすべるように走り、私にとっての未体験ゾーンである橘家に向かった。

とうとうやって来ました橘家に。

閑静な住宅街の奥まった所にひときわ目立つお洒落なフェンスで囲まれた一角。

品良くデザインされた金網の内側の広大な敷地には適度に配された木々と花々。

その奥には、どこかの外国にでも来たのかと勘違いしそうな白亜の豪邸。

そう、それが橘先輩の自宅だったの。

その家の玄関前に降り立った時、私は思わず眩暈がしたくらいだったわ。

呆然と立ち尽くす私に橘先輩はアッサリ言ったの。

「あばら家へようこそ」

どこが『あばら家』じゃ。

これが『あばら家』だったら私の家はウサギ小屋、いやドブネズミの巣だっっちゃうの。

私は橘先輩に導かれて豪邸の中に入って行った。

橘家の使用人達が私を満面の笑顔で迎えてくれた。

こっちの方は完全に引きつった笑顔。

こ、ここは皇居か？

そのまま私はまっすぐ橘先輩の部屋に案内された。

どう見ても20畳くらいはありそうな広さ。

その洋間はまるでホテルのスイートルームと見間違えるくらいにセンスのいい調度品に囲まれていて、とても高校生の部屋とは思えなかったわ。

戸惑っている私を、橘先輩は部屋の一角にある大型のソファに案内してくれたんだけど、これがまたお洒落なデザインなんだよね。

橘先輩に聞いたらイタリア製なんだって。お値段も知りたかったけど、さすがにそれは聞けなかった。

座り心地満点のソファに座りながらも私は何となく居心地の悪さを感じてしまったのは貧乏人ゆえ？

橘先輩はそんな私に構わずに話を始めた。

「お前も知ってると思うけど橘学園の学生が連続して事件に遭ってるんだ」

「は、はい・・・ホントにひどい話ですよ。許せない」

「うちの学園に対して悪意を持っている奴が居るってことだと思う」

「偶然じゃないですよ」

「ああ、絶対偶然なんかじゃない。このまま見過ごすことは出来ないよ。それにもうすぐ夜行祭りだ」

「ヤコウマツリ？」

「お前は初めてだろうけど橘高校伝統の行事があるんだよ。夕方から12時間かけて50kmを全校生徒で歩くんだ」

「そう言えば仙台に居た頃に聞いたことがあります」

「その行事の最中に、この犯人がまた悪さをしないと限らないよな？」

「そっか・・・大勢の女子学生が真夜中に歩いているんだから、犯人にとっては願っても無いチャンスかもしれない」

「そういうことだ。だが今度は思うようにはさせないぞ。俺達チームGLが学園の平和を守るんだ」

「いよいよ出動ですね？」

「そうだ。でも日本に今いるのは俺とお前だけだよ」

「いいじゃないですか。とにかく始めましょう。もう黙って見てはいられないですからね」

「そうこなくちゃ。さすがチームGLのリーダーは話が早いな」

こうして私達は、チームGLとして出来ることは何か話し合ったの。

さっきまでの浮ついた気持ちなんて吹き飛んで、今、私達2人の間には真剣な思いが共有されていたの。

私達が学園を守る！

その思いで2人の気持ちは完全に一致したわ。

役得？

突然部屋の電話が鳴って橘先輩が受話器を取った。

「うん。わかった。すぐ行くよ。ありがとう」

内線電話だったらしい。橘先輩は受話器を置いて私に言った。

「夕飯の準備が出来たそうだから食堂に移動しよう」

「えっ？ お食事？ そんな悪いです・・・」

「いいじゃん。せっかくだから食べていけよ」

と言う訳で、図々しくも晩御飯をご馳走になることになったのでした。

橘先輩の後について食堂なる場所へ行った。そしてまたビックリ。

こりゃホントにレストランだよ。しかもファミレスじゃなくて高級レストランって感じ。

テーブルの上には白いクロスがかかっている、しかもナイフやフォークのセットが既に並べてあった。

「あ、あの・・・夕ご飯って何が出てくるんでしょうか？」

「ん？ 今日はフランス料理だと思うよ」

「フ、フランス料理？」

このナイフとフォークの本数から見てフルコースの可能性大だ。

テーブルマナー自信が無いんだけど・・・。

って言うか、普通家でフランス料理なんか出てくる？

もう信じられない。

でも用意されているのは2人分だけだった。

「私達だけですか？」

「そうだよ。ウチの家族は今頃イタリアあたりに居る筈だからね」

「イタリア・・・」

どうも庶民の感覚で居ると頭がおかしくなりそうなので、今夜はシンデレラ気分で過ごすことに決めた。

間もなく給仕の老紳士が最初の料理を運んで来た。

「スモークサーモンとキャビアでございます」

「ど、ども・・・」

美味しい。と言うより珍しいかな？

こんな高級なの、そうそう食べられないもんね。しっかり味わっておこう・・・。

「コンソメスープでございます」

2品目のスープも大変美味しゅうございましたわ。オホホホ・・・。

「ヒラメのワイン蒸しでございます」

うーん、この舌触りが最高ざますわ。

それにこの白ワイン。未成年なのがいいのかな？

「牛ヒレ肉でございます」

出ました、ステーキ。赤ワインが美味い。少し酔いが回り始めたかな？

「温野菜と季節のサラダでございます」

もう、お腹いっぱいなんですけど……。でもフードファイターのように頼張る私。

「アイスクリームでございます」

バニラアイスね。何だかホッとするわ。

「コーヒーでございます」

ふうー……。ご馳走様でした。

全て平らげて、思い出したように橘先輩を見た。

「やっと食べ物以外に目を向けてくれたな」

「……………」

面目ない。

老紳士が最後の食器を下げに来た。そしてにこやかに語りかけてきた。

「早乙女様、如何でございました？ お口に合いましたでしょうか？」

「あ、はい、もう美味しくて美味しくて」

「お前、まだ足りないって顔してるぞ」

「やだ、先輩ったら」

私と橘先輩のやり取りを聞いて、老紳士は朗らかに笑った。

先輩もニヤリとして私のことを見ていた。

私は何だかホントに上流階級のマダムにでもなったような気分だったわ。

こんな生活続けてたら、アッという間にブタになること間違いなしね。

「ジイもシェフも今夜はもういいよ。キリのいいところで帰ってね」

「はい、ありがとうございます。お坊ちゃま」

うわー・・・今、ホントにお坊ちゃまって言ったよ。

何だか映画でも見ているような気分だ。現実感ない。

私達はまた橘先輩の部屋に戻って少しの間ノンビリしていた。

外で車の音がする。さっきのジイとシェフが帰宅するようだ。

と言う事は、

「これで私達2人きり？」

「そういうことになるな」

「なんかドキドキ」

「これで誰も助けにくる人は居ないってことだぞ」

「えっ？」

「ガオ————！！！」

橘先輩はわざとらしく私の上に覆い被さってきた。

「キャ————！！！」

これもわざとらしく無抵抗で嬌声をあげる私。

でも、これってどうなの？

どうせなら、もう少しムードのある責め方をして欲しかったなあ。

ガオーって言われても対処に困っちゃうよなあ。

案の定、そこから先が続かず、橘先輩はスゴスゴと私の上から降りちゃった。

ちょっとガッカリ……。

その後、少し真面目な話もした。明日の夜からパトロールをしようという話だ。

具体的な案も考え始めたんだけど、何しろお腹がいっぱいだから、つつい瞼が重くなってくるんだよね。

それで結局明日は橘先輩がバイクで迎えに来るってことだけ決めてミーティングは終了となったの。

それから後は世間話ってやつですね。

それも若者らしく、好きな異性のタイプとか、どこに行ってみたいとか、好きなミュージシャンは誰で、好きな歌は何だとか。

ホントは自分の正直な気持ちと言えればいいのに、それができる訳もなく、何となく奥歯に物が挟まったようなアピールになっちゃうんだよね。

ああ、もう少しの勇気が欲しい。

そうこうしているうちに時計の針は22時を指していた。

「そろそろ送ってくよ」

帰りたくない・・・という本音さえも言えずに、私は再び車上の人となったの。

車の中では、橘先輩も私も無口だった。

どうしてだろう。

もうすぐ2人の時間が終わってしまうから？

私が無口な理由は間違いなくそれだけど、橘先輩が無口な理由は何？

まさか、助手席にこんなに可愛いシンデレラを乗せているにも関わらず、ドライビングに熱中してるなんてことはないでしょうね？

心配になって、橘先輩の横顔を盗み見た。

ハンドルを握る橘先輩は気のせいかな寂しそうに見えた。

ああもう次の信号を左に曲ると私の家まで5分で着いちゃうよ。

真っ直ぐ行けば遠回りになって30分はかかる。

もうすぐ交差点。

曲るな。

曲るな。

曲るな。

曲るな。

曲るな。

曲るな。

曲るな・・・。

祈りが通じたのかな？ 何故か橘先輩はその交差点を曲らなかった。

でも、その後も何を話す訳でもなく、残りの30分を私達は無言でドライブを続けた。

疑惑

翌日の夕方、橘先輩はバイクに乗ってやってきた。

まずは私の部屋で作戦会議である。

それにしても、昨夜の橘先輩の部屋と比べてみすぼらしい我が部屋。悲しくなっちゃうよ・・・。

「チームのみんなが戻ってくるまでは俺達2人しかいないから大変だな」

「何かにポイントを絞らないと、どうパトロールしたらいいのか分からないわ」

「うん、それについては少し考えるところがある」

橘先輩はウェストポーチから折りたたんだ地図を取り出した。

それを広げてみると、3箇所に赤いバツ印がつけられていた。ここが事件現場なのだろう。

「今までの3件に共通することは何だと思う？」

「地図で見ると、結構範囲が集中してる・・・」

「そういうこと。まだ3件だから確実とはいえないけど、それでもこの周辺が最も怪しいと睨んでいるんだよ」

「なるほど・・・」

「それに、被害者の証言から犯人は白いセダンってことも分かってる。そのあたりに着目して警戒すればいいと思うんだ」

「パトロール方法は？」

「まずは巡回しよう」

「夜回りってやつですね」

「そうだ。俺達は素人だから、あまり難しく考えても仕方ない。とにかく人気の少ない場所を定期的に見回りすることで犯人に警戒心を起こさせることだな」

「次の事件を起こさせないためにね」

「うん。犯人の捜査は警察がやってる筈だから、そちらは本職に任せよう」

私達はさっそくバイクで出かけた。

今回はパトロールが目的だから橘先輩にしがみ付いても居られないのが少し残念だけど一緒に居られるのが嬉しかった。

ちょっと不純だな、私。

怪しいと目星をつけていたエリアに近付いてきた。霊園とそこに隣接する大きな公園のあるエリアである。

東京にしては緑が多い場所だから、昼間は結構人が多いんだけど、夕方になると少ないなあ。まあ、お墓の近くだからね。

でも、公園の中は通勤通学路のショートカットが出来るから、遅い時間でも人が通ったりするんだ。

合コン帰りの女子大生なんて、結構夜遅くに通りそうだなあ。危ない危ない。

私達はそのエリアを囲むように走る道路をゆっくりと回りながら注意深く周囲に目を走らせた。

「結構カップルの車が多いですね」

「そうだなあ。あらら、今のカップル、キスしてた」

「やだあ先輩、覗いちゃ駄目ですよ」

「覗いてる訳じゃないよ。たまたま見えちゃっただけじゃん」

「パトロールと覗きって紙一重ですね」

「確かに・・・」

私達はそんな漫才みたいなやり取りをしながら、慣れないパトロールを続けた。

この辺は幹線道路から見たら裏通りのようなものだから、車を停めて愛を語り合うカップルの車が多いんだろうな。

事件が起きた場所はここから少し行った所だった。

もうすぐだ。

あ、ここだ。警察の黄色いテープが張られてる。

さっきのカップル銀座と違ってこの辺は見通しが悪いし木陰が多いなあ。

「こんなところで事件が起きたのか」

「恐いですね」

「でも、そんなに特別な場所という訳でもないな。こんな所で車に引きずり込んで乱暴するなんて、随分図々しい犯人だな」

「でも、この辺はどうしてカップルが居ないんでしょうね。これだけ見通しが悪かったら絶好のデートスポットになりそうなものだけどな」

「その土手の向こう側に火葬場があるんだよ。だから気持ち悪いんだろ」

「そっか・・・」

言われてみればそんな感じがしてくる。全ての状況には理由があるのね。

ここを抜けると住宅街へ続く道に出るから、被害者はやはり通学路に使っていたんだろうな。

「ここが第1の犯行現場だよ。次は第2の現場に行こう」

バイクはゆるい坂道を下り続けて、さっきの火葬場がある場所の裏手に出た。

ここはまさに人気の無い裏道という感じだった。そして小さな神社がある。

第2の現場はその神社の境内だった。

「こんなところで犯行を行うなんてバチ当たりな犯人ですよね」

「まったくだ」

「やっぱり神社の周りは木々に囲まれて境内は見えにくいですね」

「しっかり計算されてる感じだな。やっぱり行き当たりばったりの犯行じゃないよ。計画的にウチの学生を狙ったんだ」

第3の現場は公園のはずれにある管理事務所の駐車場だった。

この駐車場は道路から見ると事務所の建物の裏側にあって周囲から見えにくい。

それに、ここの職員達は夕方になると帰宅して誰も居なくなるのだ。やはりここにも死角は存在した。

「でも、この駐車場を女の子が偶然通りかかるなんてことがあるでしょうか？」

「あり得ない。この駐車場は袋小路のような構造になってるから、通り抜けは不可能だ」

「さっきの神社だって通り抜け出来そうな所はなかったですよ」

「という事は無理やり連れて来られたって訳か？ 複数犯の可能性もあるな」

「複数犯・・・」

ますます怖いよ。

複数の男達が、たった1人の女の子を寄ってたかってレイプしている姿が目に浮かんできた。

許せない。

とその時、私達の目の前の道路を1台の白いセダンが通りかかった。

運転手は大きなサングラスにニット帽、助手席の同乗者も同じだ。

2人とも駐車場の方に目をやりながら管理事務所の前をゆっくりと通り過ぎていった。

私は念のため、その車のナンバープレートの番号を手帳にメモした。

翌日、涼子と隆俊さんが旅行から帰ってきて私達に合流した。

2人とも私達の計画案を聞いてすぐに同意してくれたんだよね。

とりあえず私と橘先輩の班と涼子と隆俊さんの班に分かれて巡回することになった。

涼子も原付の免許を持ってるから1人で回ることも出来たけど、女1人での行動は危険ということで、必ず2人以上で動くことになった。

2つの班は、昨日私と橘先輩が回ったコースを互いに反対回りにすることにした。

ゆっくりと巡回する訳だから、私達が通り過ぎた後が危険な時間帯という訳だけど、2班になったから少しは改善されたかな。

これが3班、4班と増えていけば、より確実なパトロールになるんだけど、みんな早く帰ってきてくれないかな・・・。

そう言えば、涼子からの報告で昨日の白いセダンは今日も出現したとのこと。

怪し過ぎるよ。あの2人組は。

チームGLのメンバー達が続々と帰国してきてパトロール隊の人数は一気に増えた。

しかも、チームへの参加希望者がこのところ急増しているのだ。

女子8人、男子5人が新たなメンバーになってくれたの。

これで総勢21名になり、入っていきなりで悪いと思ったけど、さっそくパトロール隊に参加してもらったの。

でもみんな喜んでやってくれたんだ。何だか橘学園の雰囲気変わってきた？

世の為、人の為ってというのが全然見られなかったこの学園の学生達から、チームGLの趣旨に賛同する人がこんなに現れるとは思ってもみななかったよ。

リーダーとしては、ますますもって責任重大だね。

そして21名の隊員達は10班に分かれて毎晩パトロールをしている。

当初の対象エリアだけでなく、その周辺のエリアにも手を広げて万全を期する方針に変わったの。

今のところ、新たな事件は起きてない。

でも気になるのは、例の白いセダンの2人組。あれから後も頻繁に目撃されているの。

新たな獲物を物色しているのか？

それとも私達を警戒しているのか？

いずれにしても今回の事件と無関係には思えない。

パトロール隊員全員にこの車のナンバーと2人組の情報を周知して、今度見かけたら出来るだけ注意深く観察するように指示をした。

夜行祭り

8月20日。とうとう夜行祭りの当日になった。

私達橘高校の全校生徒は学園から50km離れた東陶寺という大きなお寺の前の広場に集合していた。

この辺りは東京と言っても一部に畑があったり林があったりして、ちょっと牧歌的な風景を見せている。

その中に総勢1000人弱という大人数である。そのうち女子の占める割合は6割。

毎年恒例のことであるから近所の人達も慣れたものであるが、知らない人が見たらかなり異様な光景であることは間違いない。

この全員が19時のスタートとともに50km先の橘学園を目指して夜通し歩き続けるのが橘高校名物行事『夜行祭り』である。

大体の目標到着時刻は明日の朝6時頃。それを目指して各自がペースを計算して歩きとすすのである。

「ねえ涼子。去年はどんな感じだった？ 経験者として教えてよ」

「うーん、そうねえ・・・最初のうちはハイキング気分だと楽しかったよ」

「最初だけ？」

「最初はみんな賑やかだし元気だから話をする余裕もあるんだけどね。しばらくすると寡黙になってくるのよね」

「眠くなかった？」

「眠いよ。特に深夜2時くらいは眠さのピークよ」

「おいおい、そんな情けない話をしていたら困るな」

突然後ろから声がかかり、振り向いてみたら橘先輩と隆俊さんがニヤニヤ笑いながら立っていた。

「チームGLに集合をかけてくれよ。今夜はただ歩くだけじゃないだろ？」

「あっ、そうだ。自らも歩きながら同時にパトロールもするんですよね。すぐに集めます」

私達4人は手分けしてチームメンバー全員に携帯電話で連絡を取った。

5分も経たないうちにチームGL全員が集めた。今日までにメンバーは50人を超えていた。

その全員に、今日の昼間に予め作っておいた担当割を配った。

「この紙にあるようにペアを組んでもらって、今夜の行事に参加してください。特に周りの女子に対して悪さを仕掛ける人が居ないか警戒をお願いします」

「それと、白いセダンを見かけたら注意してくれ。もしかすると犯人かもしれないんだ。ここ数日のパトロールでも何度も見かけている車だ。ナンバーは」

私と橘先輩はメンバー達に対して細かな指示を与えてから解散した。

間もなくスタートの時刻である。

19時きっかりにスタートのピストル音が鳴った。

陸上競技じゃあるまいしピストルの音でスタートするというのも変な感じだけど良い代案も浮かばなかったんだろうな。

だけどそのピストル音が鳴っても全員がスローペースで思い思いに動き出すんだから締まらないよね。

そんな中で私は橘先輩とペアを組んで最後尾を歩いていた。

もちろん橘先輩とペアになったのは偶然ではない。

リーダーの職権乱用である。

実は前々から狙っていたんだ。私達2人が司令塔の役目をして隊員全員をコントロールするんだとか何とか言って、私が担当割を決めちゃった。

エヘヘ・・・でも、これくらい良いよね。

体力自慢のメンバーは先行するグループに合わせて、それ以外のメンバーも適度な間隔を持って歩いてもらうことになっている。

今年は夜行祭りの直前にあんな事件が連続して発生していたから、女子達は用心して4～5人の塊になって歩いているみたい。

警戒する私達からすれば良い傾向よね。守り易い。

それに先生達もコースの周囲に陣取って見張っているから今夜事件が起きることはないだろうけど油断は禁物だよね。

気を引き締めつつ、こうして夜行祭りは始まったのであります。

歩き始めたら、次から次へと私と橘先輩の携帯に連絡が入り始めた。

予め打ち合わせた通りの定期連絡の第1回目である。

みんな「異常なし」とか何とか固い用語を使って報告してくるけど、その声は弾んでいる。

楽しんでもるな……。

私は良かったと思った。

パトロールなんていう損な役回りを引き受けてもらうのに申し訳なさを感じていた私だったから、メンバーの様子は一番気にかかっていたんだ。

だけど、もしかすると何の目的も無しで歩くのと、私達のようにある使命を持って歩くのとでは精神的に随分と違いが出るのかもしれないな。

子供の頃の探偵ゴッコの延長のような……と言ったら怒られるけど、何かを担っているという気持ちは人を前向きにさせるよね。

でも、まだスタートしたばかり。今夜は長いよ。気負いは禁物。私も楽しみながら歩いて行こう。橘先輩も一緒だし……。

スタートした時は夕焼け空だったけど、今はもう闇に包まれ始めている。

この辺りって街灯も少ないから薄暗いんだよね。

その中を大勢の人達が静かに歩き続けている。

とっても異様な光景。

そしていつしかザワつきも消えて静かな夜の世界に変わっていった。

私はお手洗いを借りるためにコンビニに入った。橘先輩はお店の前で私を待っている。

早いトコ用を済ませて店を出ようとしたら・・・。

橘先輩のそばに1人の女子が立っている。

何かを懸命に橘先輩に訴えているように見えた。

私はそっと後ろから近付いて行ったの。橘先輩はすぐに私に気付いたけど、その女子は全然気付かずに相変わらず橘先輩に詰め寄ってる。豪徳寺紗枝子である。

「健二君ったら、あんな小娘に丸め込まれて情けないったらありゃしないわ」

「俺が誰と何しようが勝手だろ？」

「私の気持ち、知ってるでしょ？」

「お前は兄貴の彼女。それだけだよ」

「私はもう健一さんになんて興味ないわ」

「あんなんでも俺にとっては兄貴だからな」

「慶子さんの次はあの山猿なの？ 私なんて気にもしてもらえないの？」

ケイコさん？ 誰よそれ？

私はいつまでも盗み聞きしているのが心苦しくて、わざとらしく咳払いをしたの。

豪徳寺紗枝子は驚いたように振り向くと私を恐れ目で睨んだ。

「またあんたなの・・・もう疫病神のように私達に付きまとわないで頂戴！」

付きまとってるのはどっちだよ・・・。

「あんたなんか私や健二君とは住む世界が違うんだから近寄らないでって言ってあげた筈よ！」

「確かに豪徳寺は住む世界が違いそうだな。でも俺はアイミーと同じ世界に住んでるぜ」

「なんですって！？ 何よその言い草・・・また私だけのけ者にして！」

「俺達は今、共通の目的を持って活動をしている。アイミーは俺の大事なパートナーだ」

「パートナーですって？冗談じゃないわよ。こんな山猿と付き合ったら健二君まで変になっちゃうわ！」

「俺は俺の信じる道を行くだけさ。そしてその道はお前の道とはベクトルが完全にズレてるよ」

「この山猿に騙されているのよ。健二君お願いだから目を覚まして頂戴！ 私と一緒に来て頂戴！」

「言った筈だ。アイミーは仲間なんだ。俺の仲間を悪く言う奴は誰だって許さないからな」

「健二君・・・」

豪徳寺紗枝子はまた私を睨むと傷心の様子で離れて行った。

その先の暗闇には黒い大きな外車が待機している。

どうやらここでリタイヤするみたい。早っ・・・。

橘先輩と私は顔を見合わせてタメ息をついた。

何だか私は聞いてはいけない話を聞いてしまったようで、ちょっと複雑な心境だった。

要するに私は豪徳寺紗枝子が橘先輩に告げた現場に遭遇したって訳でしょ？

『もう健一さんになんて興味ないわ』って、その弟に対してよく言うよ。

それに『ケイコさん』っていうのは何者？

うーん・・・何だか橘先輩には謎が多いなあ。

聞いてみたいけど、橘先輩何だか考え込んでいるみたいだから話しかけづらいよ。

「すまん、アイミー。また不愉快な思いをさせて」

「いえ、そんなの平気ですから」

ここまでのいい雰囲気だったのに、女王様のせいで台無しだよ。

とにかく私と橘先輩はコースに復帰して歩き始めた。

しばらくの間、2人とも無言だった。

新たな疑惑

午前零時の定期連絡が入った。その時、カナが驚くべき情報をもたらした。

「先輩・・・例の白い車を発見しました」

「えっ？ ホント？」

「はい・・・でも・・・」

「どうしたの？」

「車の持ち主が・・・」

「えっ？ 持ち主まで分かったの？」

隣で聞き耳を立てていた橘先輩が目を見張った。

「持ち主は・・・」

「うんうん」

「岡島先生です」

「え———！！！」

ちょっと、どういう事？

私達の中で最も犯人に近いと思っていたあの白い車の持ち主が私の担任の岡島先生って・・・。

まさか犯人？

でも岡島先生は若くてハンサムだし・・・。

って言うか、それは関係ないけど。

しかも学校関係者だから女子学生を守る立場にある訳だし、岡島先生は真面目で清潔感のある人だし。

私は何とか自分の頭の中から岡島先生犯人説を追い出そうとしていた。

その後も続々と白い車を発見したという連絡が入り続けた。

しかも全て、その持ち主が岡島先生であるという報告付きだった。

ホントにチームGLのメンバーって何て優秀な探偵なんでしょ……。

この時、私としては嬉しいような悲しいような複雑な気持ちだったの。

やがて私と橘先輩もその白い車を発見した。

確かにナンバーは以前に私がチェックしたものと同じだった。

そして間違いなく運転席に居るのは岡島先生。

助手席には数学の佐々木順子先生が乗っていた。

順子先生はバツイチの子持ちなんだよね。確か岡島先生より年上の筈。

うーん……順子先生。何も知らずに岡島先生と楽しそうに笑顔で話してる。

そして私達を見つけるとニコニコと笑顔で手を振ってくれたの。

私は複雑な思いで手を振り返したわ。

「橘先輩、岡島先生のことどう思いますか？」

「まいったな……まさかウチの教員だなんて」

「まだ先生が犯人って決まった訳じゃないですよ」

「そうだな……でも犯人じゃないって決まった訳でもない」

「……………」

その通り。何だかお先真っ暗って感じがしてきた。

そんな気が重い状態のままで私達は午前2時を迎えていた。

涼子が言っていた通り、私は激しく襲う睡魔と闘いながら歩を進めていた。

歩きながら一瞬夢を見る。

女子が犯人に襲われる夢。その女子は私。そして犯人は岡島先生。

ギョッとして正気に戻るけど少し経つとまたウツラウツラしてしまう。

そんな私を気遣って、橘先輩はさっきから私と手をつないでくれていた。

私は橘先輩に引っ張られて何とか真っ直ぐ歩いているという感じだったの。

でも手をつなぐって不思議だね。

子供の頃は何てことなかったけど、大人になって手をつなぐことがこんなにも幸せな気分になるなんて初めて知ったよ。

私も橘先輩も掌に汗をかいているから、普通ならベトベトで気持ち悪い筈なのに手を離したくないの。

今、信じられるのは橘先輩だけだよ。

こんな暗闇の中で、私は橘先輩だけを頼りにして歩いている。

橘先輩も少し辛そうだ。でも力強く私をサポートしてくれる。

そう言えば豪徳寺さんに私のことを大事なパートナーだって言ってくれたよね。

一体パートナーって何？

パートナーか・・・。

辞書で引いたら恋人とか夫婦なんて出てこないかな？

橘先輩は私のことをどう思ってるの？

あくまでもチーム活動上のパートナー？

それとも・・・。

ただ豪徳寺さんは間違いなくパートナーの意味を恋人だと受け取ったわよね。

私を睨む目に殺意がこもってたもの。

まあ別にいいんだけど。

だけど豪徳寺さんに誤解されるような言い方をした橘先輩も微妙だよなあ。

私のこと好きかなあ？

でも嫌いではないよね？

嫌いだったら手なんてつないでくれないよ普通。

手をつないでいるってことは・・・私のことが好きってこと？

それは飛躍し過ぎだろ。

頭が朦朧としているから考えがさっきから同じところでグルグル回りしてる。

もう眠さが半端じゃなくて歩きながら気絶しそう。

私は橘先輩の腰にしがみついてウエストポーチのようになっている。

もう橘先輩のウエストポーチになりたい・・・。

眠い・・・。

3時、4時とメンバーからの定時連絡は入り続けた。もちろん何の事件も起きていない。

心のどこかで悪魔の声が聞こえてくる。

『今夜事件が起きる筈はない。だって犯人は順子先生と一緒に居るじゃないか』

その悪魔に聖水をふりかけて消滅させても、後から後から新しい悪魔が顔をのぞかせてくる。

悪魔のもぐら叩き状態だ。

虚しいなあ・・・。

やがて東の空が薄明るくなってきた。

「もう夜明けですね」

「ああ、この瞬間だけは荘厳な気持ちになるよ」

「私、家族で初日の出を見に行つて以来かな」

「いつの？」

「小学校3年・・・」

「そりゃまた随分とご無沙汰してたねえ。今朝はしっかりと朝日を拝みなよ。アハハハ！」

マズイなあ・・・何だか寝坊助のイメージを持たれたみたいだ。

まあ、事実だけど。

空はドンドン明るくなってきた。

東の方角が眩しくて、もう直接そっちの空を見るのが辛いくらいだった。

そして黄金色の太陽が遠くのビルの谷間から昇り始めた。

都会の日の出なんて今まで全然イメージできなかったけど、こうして見ると場所がどこだろうがやっぱり朝日って良いね。

何だか気持ちが洗われるようだよ。

しばらくの間、私と橘先輩は声も出さずにその光景を見つめていた。

これで私は橘先輩と一緒に夕陽も朝日も見ることができた。しかも2人きりで。

私の心にじんわりと温かい幸福感が満ちてきた。

まるで時間が止まったみたい。

やがて我に返った私達はまた手に手を取り合って歩き始めた。

ゴールまであと5キロしかない。もう周りの景色は見慣れたいつもの街並みに変わっていた。

全校生徒がゴールしたのは朝8時を回っていた。もっとも最後にゴールしたのは私と橘先輩だったんだけどね。

まる一晚、歩き続けることがこんなに大変だとは思わなかったよ。

橘先輩が居てくれなかったら絶対ゴールできなかったと思う。

だからゴールした瞬間はやっぱり感激したよ。

それと同時に猛烈にお腹が空いてきた。

学校側が私達の為に用意してくれた朝食をチームGLのメンバー達と一緒に食べたんだけど、こういう時に食べる物って何でこんなに美味いんだろうね。

みんなしっかりガッツいていたよ。

そして食べながら昨夜の反省会をしたの。

やはりみんなハッキリと口には出さなかったけど白い車の件はショックだったみたい。

橘先輩がみんなに、まだ決まった訳じゃないからと言っていたけど、とりあえずしばらくは口外しないで様子を見ることにしたの。

神様、どうか間違いでありますように・・・。

こうして夜行祭りが終了してチームGLも随時解散したんだけど、私は橘先輩の自宅に寄って今後の打ち合わせをしてから帰ることになったの。

だけど・・・。

また例の豪華な部屋に通されてソファに座っているうちに、つつい爆睡してしまって目が覚めたら夜になってた。

しかも目覚めた時、私はソファじゃなくて橘先輩のベッドに寝かされていたの。

寝起きの私を橘先輩は呆れ顔で眺めていた・・・。

またドジ踏んじゃった。

しかも、シクシク・・・寝顔見られた。

容疑者逮捕

チームGLが毎晩パトロールを欠かさないお蔭なのかどうかは知らないけど、一番危険視していた夏休み中の事件は今までのところ発生していなかった。

でも相変わらずパトロール中のメンバー達は岡島先生の車を目撃することが多かったの。

いつ遭遇しても2人乗車でゆっくりと走っているし、助手席の奴も常に顔を隠しているのがメチャメチャ怪しいんだよね。

噂では岡島先生は警察の事情聴取を受けたらしい。これは翔太からの情報。

中学部でも犯人の白い車と岡島先生の愛車との関連を紐付けて無責任な噂を流している奴がいるらしいの。

まあチームGLメンバーは他の情報も掴んでいるだけに、それらの噂には人一倍敏感になっていたのかもしれない。

だけど学園の平和を考えると教師がレイプ魔という噂は放ってはおけない事態だよな。どうやら理事会の方にも噂が届いて問題視されているらしいんだって。

そしてとうとう理事会に岡島先生が呼ばれて事情を聞かれたという話を橘先輩が教えてくれたの。

「どうなっちゃうんでしょうね。岡島先生」

「うーん、俺にも分からないな。無実だと信じたいけど、それを裏付ける証拠でもないとな」

「警察に話を聞かれたっていう噂も流れてます」

「それは事実だそうだ。職員室に警察が来て、岡島先生だけ別室に連れて行かれたらしい。教頭先生が言ってたよ」

「そうなんだ・・・でも教頭先生、いくら橘先輩が理事長の孫でも話し過ぎじゃないですか？」

「アハハ、俺の親戚だからな。つい気を許しちゃうんだろ」

「あらら・・・教頭先生もお身内ですか」

「それに俺達チームGLの活動についても俺から理事会の方には話をしてあるから、裏情報を流してくれてるんだと思うよ」

「裏情報ですね」

「そう、裏情報だ。だからこの話も俺とお前の2人だけの秘密だぞ」

「ラジャー！」

何だかスパイ映画みたいな展開になってきたなあ。

だけど大好きな岡島先生が被告人っていうのが大誤算だわね。

もうすぐ夏休みも終わりだけど、岡島先生は2学期ちゃんと学校に来られるのかしら？

まさかクビなんてことはないよね。

もしも本当に犯人で、逮捕されたりしたら仕方ないけど、今はまだ疑われているだけだもんね。

でも上流階級の人達って何を考えてるのか分からないところがあるからなあ。

『疑わしきは罰せず』じゃなくて『臭いものに蓋』式に対処したりして。

そんなことになったら大変だよ。絶対学園は大騒動になっちゃうよ。

夏休みが終わった。

そして2学期最初の日、職員室に岡島先生の姿はなかった。

私はそれを知ったとき、心臓が口から飛び出すかと思ったの。

岡島先生が逮捕された？

ホントに？

マジで？

嗚呼、とうとう現実になってしまった。

ホントにあの岡島先生が連続レイプ魔？

信じられないよ。

順子先生も急遽お休みを取っているらしい。

夜行祭りの夜、岡島先生と楽しそうに話していた順子先生の姿を思い出した。

やっぱりショックだよね。

順子先生、もしかして岡島先生のことを好きだったのかもしれない。

何故だか急にそんなことを思ってしまった。いわゆる女の直感ってやつ。

もしそうだとしたら、順子先生が可哀想だよ。

岡島先生、何てことしてくれたのよ・・・。

岡島先生逮捕のニュースはそれこそ瞬く間に学園中に広まったわ。

当然PTAも騒ぎ出し、学園の経営陣達は対応に四苦八苦していたみたい。

そして私達チームGLも容疑者逮捕の報を受けて夜間パトロールの終了を決定したの。

何だか夢を見ているようだった。あの岡島先生がレイプ犯だなんて、そんなこと信じたくなかった。

そんな9月初旬のある夜。

なんと第4の事件が発生したの。今度の被害者は橘高校2年生、あのイヤミ女王こと谷岡道子だったの。

同じクラスから被害者が出たのはショックだった。

でも同時に岡島先生の無実が証明された瞬間でもあった。

厳密に言えばまだ前の事件との関わり合いが判明していないから無実の証明にはならないけど、もう誰も岡島先生を犯人だとは思っていなかった。みんな絶対冤罪だって言ってたわ。

そして翌日、岡島先生は釈放されたの。

橘先輩に聞いたら、順子先生が重要な証言をして無実が証明されたんですって。

重要な証言って何？

橘先輩に聞いたら、まだ内緒だって言われちゃった。

でも橘先輩、少しニヤッと笑ってみせたから、もしかすると私の直感が当たっていたのかも？

「もしかして順子先生の愛の力ですか？」

「だからまだ内緒！」

「けち・・・」

無事生還を果たした岡島先生は私達の前で頭をかいて説明したの。

「いやー、今回ばかりは参ったよ。まさか僕が犯人と同じタイミングで動いていたとは知らなかった」

「順子先生が助けてくれたんでしょ？」

「ん？ うん。実は・・・順子先生なんだけど」

「はい？」

「もう隠していても仕方ないから話しちゃうよ。僕は順子先生と結婚するつもりなんだ」

「ええ——！！！」

「この夏休みの間中、僕と順子先生は常に一緒だったんだ」

「私達も岡島先生の車を目撃しましたが、助手席には怪しげな人が・・・」

「アハハッ、あれは順子先生だよ。お前達の姿を見かけると慌てて顔を隠してバレないようにしてたんだ」

「何で？ 堂々と交際宣言すれば良かったのに」

「それが、そもいかない事情があってね」

「事情？」

「彼女、バツイチという事になっているけど、本当はまだ籍を抜いていないんだよ。戸籍上はれっきとした人妻なんだ」

「バツイチじゃないの？」

「離婚するつもりで別居中ということさ。だから今、他の男と交際していることが公になるとマズイと思ったんだ」

「順子先生の離婚訴訟に悪影響を及ぼさないために自分の無実を証明しなかったって訳？」

「まあね。でも、順子先生がすぐに駆けつけて全てを警察に話してくれたから僕は無罪放免になったって訳なんだよ」

「そっか・・・やっぱり愛の力だねえ。憎いよこの色男！」

こんなやり取りで私達は岡島先生のご帰還を喜んだんだけど、先生が犯人じゃないということは、まだ真犯人がその辺をウロついているっていうことだよな。

1度は終了宣言した夜間パトロールだけど、直ちに再開しないといけないね。

第4の現場はこれまでのエリアから少し離れた場所だから、警戒範囲も見直さないといけないみたい。

また忙しくなるなあ。

でも岡島先生が無実だって分かったから張り切って真犯人探しに邁進できるってもんだよね。

よし、頑張るぞ！

ボンボン

今やチームGLは100人を超す大所帯になったの。

再開したパトロール隊はなんと50班にもなった。

もう夜の街には右を見ても左を見てもチームGLメンバーが居るんじゃないかってくらい豊富に人材を投入しちゃってます。

なにしろド派手なスタジャンを着たペアがあっちにもこっちにもウロウロしてるんだから、そっちの方が異様な感じだよ。

この網の目の細かさは警察でも敵わないんじゃない？

しかも、私達の活動が目立つもんだから、ますます参加希望者が増えていくんだよね。

マジで学園を制覇する勢いだよ。

そして、いつの間にか私の顔と名前が橘高校だけじゃなくて幼稚園から大学まで幅広く知れ渡ってしまったみたいなの。

な、なんと、早乙女愛美ファンクラブなるものまで出来たという噂も。ホンマかいな？

それはともかくとして、私達の活動は今や学園中の注目の的になってるの。

学生達からはもちろんのこと、学園側からも日々応援の声が届いてくるんだ。嬉しいよね。

この調子でこれからも頑張らなきゃ！

そんな矢先、私の自宅にある手紙が届いたの。

早乙女愛美様・・・差出人は太郎？

誰だ？ 太郎って・・・。

封を切って中の手紙を取り出してみた。

なにになに・・・、

『僕は太郎。アイミーちゃんの大ファンだよ。今度ぜひ一緒に食事に行ってくれない？ 美味しい店に連れて行くから。

おっと、自己紹介がまだでした。僕の名前は太郎。21歳の大学生だよ。

趣味は車とピアノ。そのうちドライブでも行けたら嬉しいな。それから僕が作曲したアイミーちゃんに捧げる曲も聴いて欲しいよ。

とにかく今はアイミーちゃんに夢中。ファンクラブ会員第1号は僕だよ。

ぜひ下記メールアドレスまで連絡ちょうだい。

待ってます』

おいおい・・・ファンレターだよ。

マジでファンクラブがあるの？

会員第1号なんて誰が決めたんだよ。

随分勝手な男だよなあ。

でも、

こんな手紙もらったの生まれて初めてかも。

デヘヘ、ちょっと嬉しいもんだね。

それから、手紙の最後に書いてあったメアドは携帯メールのものだった。

返事、出した方がいいのかな？

でも苗字が書いてないよ。

野球選手じゃあるまいし苗字くらいちゃんと書けよなって感じだなあ。

それにこいつ、すごく軽そうなイメージなんだけど。

どうしようかな・・・。

そうだ、涼子に相談しよ。

私は早速涼子にアポを取り付けた。そして20分後にはバイクに乗って私の家まで来てくれたの。

「これなんだけどさ」

「どれどれ？・・・うーん微妙だわねえ。大丈夫かしら」

「パトロールも忙しい時だし無視してもいいかな？って思ったりして」

「でも無視するのも悪いって気持ちなんでしょ？」

「うん・・・」

「とりあえず当たり障りの無い返事を出しておいたらいいんじゃない？」

「じゃ、一緒に文面考えてくれる？」

「いいよ！」

やっぱり持つべきものは親友なのであります。

『太郎さま。

お手紙ありがとうございました。嬉しかったです。

お食事の件は、もしも機会がありましたらお願いします。

それでは！

愛美より』

こんなメールを送った後はパトロールの時間が来るまで涼子とお喋りタイム。

そして、この手紙のことはすっかり忘れていたんだよね。

ところが、パトロールを終えて家に着いた時だった。

送ってくれた橘先輩が見えなくなるまで見送ってから玄関に近付いた時、私は暗がりから誰かに声をかけられたの。

ギョッ！として声の主を凝視する私。

「ごめんごめん。アイミーちゃんを驚かすつもりじゃなかったんだけど」

「あの・・・どなた？」

「僕、太郎です。手紙を出したでしょ？」

「あ、ああ・・・太郎さんですか。何か？」

「メールで返事をもらったから嬉しくなって会いにきちゃった」

マジで？

しかも、私が帰ってくるまで待っていたの？

だとしたら橘先輩にバイクで送られてきた私を見てた筈だよね。

しかも、未練たらしく見えなくなるまで見送っていた私の姿も。

それって恋人同士に見えないかな普通……。もっとも恋人同士じゃないけど。

それを承知で声をかけてくるなんて、この太郎さんって人は一体どういう神経してるの？

暗闇の中でジッと待っている太郎さんの姿を想像すると、ちょっと寒気がした。

「ごめんね。ホントに今日は顔を見たかっただけなんで、これで帰ります。また連絡しますね。食事行きましょう」

「えっ、あ、はい……」

太郎さんは暗闇に停めてあった車に乗り込んでエンジンをかけた。

すぐにスモールランプが点灯してその車のアウトラインが浮かび上がった。

これって……。

絶句しちゃった。だってその車、まるで未来から来た車みたいに斬新なフォルムをしていたんだもの。

車高が地を這うように低くて、ドアは横に開くんじゃなくて上に跳ね上げるように開くの。

いわゆるスーパーカーって言うのかな？

値段高そー……。

太郎さんは私に笑顔で手を振ると、エキゾーストノートも高らかに走り去った。

なんて派手なんだろ。

なんだか最近、私の周りに現れる人達は超金持ちばかりだなあ。

これって良い傾向なの？

私だけ平民だっていうのが現実としてヒシヒシと感じられて虚しいんだけど。

でも、考え方を換えれば玉の輿に乗るチャンスってことも言えるか・・・。

ムフフッ！

それに、こうして見ると私って結構モテるじゃん。

今の太郎さんて人は少し微妙だけど・・・いや待てよ・・・会った感じは別にキモイ風では無かったな。

もちろん橘先輩に比べたら数段落ちるのは間違いないけど別に普通の人だ。

まあ、メル友くらいなら構わないか・・・。

だけど大学生の息子にあんな超高級スポーツカーを買い与える親ってどんな顔してるんだろ？

ウン百万とかのレベルじゃないよね。絶対数千万という値段は付くと思うよ。

健一さんの愛車だって一千万はしないって橘先輩が言ってた。まあそれでも十分に贅沢だけど、太郎さんのそれはもう度を越しているって感じがするよ。

あんなのはきっとロクなもんじゃないと思ってしまうのは庶民のヒガミか？

知らず知らず私はタメ息をつきながら家に入った。

自分の部屋に戻ると涼子に電話をかけた。もちろん太郎さんとの遭遇を報告するためだ。

「・・・ということ」

「その太郎さんが乗ってた車のこと、もう少し聞かせてよ」

「どうして？」

「ちょっと気になることがあるの。アイミーが憶えてる外見の特徴を言って」

「う、うん・・・何かドアが横開きじゃなかった。上に跳ね上がるように開くんだよ」

「うんうん、それから？」

「ヘッドライトがボンネットの上にポコンって飛び出すの」

「車の色は？」

「イエローだった。すごくド派手な色。夜でもハッキリと認識できそうな黄色」

涼子は電話の向こう側で私が言った特徴を声に出して誰かに伝えている。

『そんな車に乗ってるのはアイツしか居ない』という隆俊さんの小声が電話越しに聞こえた。

「アイミー、兄が言うにはその太郎さんて人は紗枝子さんのお兄さんじゃないかって・・・」

「サエコさん？ ゲッ！豪徳寺紗枝子？ ウソ？」

一体、どういうことよ。

距離の取り方

その後のメールのやり取りで太郎さんはアッサリと豪徳寺太郎であることを認めた。

私のこの複雑な気持ち、誰だって分かってもらえと思う。

よりによって、あの天敵豪徳寺紗枝子の兄貴が私にチョッカイを出してきたのである。

手を出す前に、もう少しリサーチしろよな！

これでますます豪徳寺紗枝子との関係が難しくなるじゃないか・・・。

あ～あ、どうしてこうなるの？

太郎さんはもう完全にメル友気分らしくて、朝・昼・夜とメールを送ってくる。

正直言ってウザいんだけど無視する訳にもいかず、それなりの返事を返してあげないといけない。

涼子と隆俊さん、それに橘先輩には今のこの状況を話したけど、他の人には内緒にしよう。

だって、いくら豪徳寺紗枝子のお兄さんでも、チームGL全員から変人扱いされるのは可哀想だもんね。

まあ、しばらく私が我慢をすればいいだけの話。

ハア・・・疲れる。

それでも相変わらずパトロールの方は順調で、チームGLはますます増殖をして今や250人です。なんと橘高校の4人に1人は私達の仲間という訳。すごいでしょ？

ただ、これだけの人数が毎晩街をウロウロしていたら防犯上はともかく、風紀上どうなのよ？っていう気がしなくもない。

あっちにもこっちにも同じスタジャンを着た若者がたむろしていると、なんだか夜遊びチームみたいだもんね。

そこでチームを2手に分けて1日交代でパトロールをすることにしたの。

Aチームは私が隊長で橘先輩が副隊長。65班130名体制。

Bチームは涼子が隊長で隆俊さんが副隊長。60班120名体制。

これで適正人数でしっかりパトロールが出来るよ。

それと、やっぱりお休みがあるって楽だね。もっともっと人が増えたら3チーム制に出来るんだけどな。そうなれば3日に1度のお勤めだから、益々みんなの負担が軽くなる。

しかし、これだけ充実の活動をしている私も、相変わらずの太郎さんのメール攻撃には閉口してる。

この際だから、パトロールメンバーに引き入れてやろうかって橘先輩達と話していたんだけど、太郎さんはそういうボランティア活動には全く興味が無いんですって。

もう、ホントに使えない奴だよ・・・。

しかし、豪徳寺紗枝子が私に対して突っかかってくるかと思っていたのに、何の音沙汰もないのは意外だった。と言うか不気味。

もしかして兄貴が私に熱を上げているのを知らないのかな？

もしそうなら一生知らないままでいて欲しいよ。もう彼女との揉め事は沢山。

それと太郎さんだけど、食事の誘いがうるさい。

こりゃ、1度くらい付き合ってやらないと駄目かな？

2人だけで会うのは嫌なんだけど・・・。

さすがにこの相談だけは橘先輩には出来ない。頼みは涼子だけだよ。

「付き合ってあげるべきなのかな？」

「微妙よね・・・1度付き合ったら勘違いされるってこともあり得るし」

「そうだよねえ・・・」

「いっそのこと、他に好きな人が居るって言ったら」

「えーっ！ 嘘つくの？」

「おやおや・・・嘘ですって？」

「なによ、ニヤニヤしちゃって・・・感じ悪いなあ」

「アイミー、まだ告白してないんだ？」

「えっ？」

「まさか私が気付いていないとでも思ってるの？」

「・・・・・・・・」

「これでも私は橘先輩とアイミーのキューピッドのつもりなんだけどなあ」

ゲゲッ！ もう完全にバレてる。

汗が出てきたよ・・・。

「い、今は太郎さんのことでしょ？」

「橘先輩の方が気になってるくせに・・・」

「もう、涼子ったら」

降参である。

こうなったら涼子に全面的に甘えて援軍になってもらった方が良さそうだな。

と言っても、身分違いの恋であることに変わりはないんだよね。

ホントに橘先輩は私のことをどう思ってるんだか。

この私のじれったい気持ちを知っているの？

こうして涼子に導かれるまま、私達の話は橘先輩の方に傾いていったの。

いつの間にか太郎さんのことなんて忘れてた・・・。

とにかく太郎さんには好きな人が居ることを伝えて諦めてもらう。それが私と涼子の出した結論。

私としてはメールで済ましたかったんだけど、さすがにそれじゃ太郎さんが可哀想という涼子の意見を取り入れて、最初で最後のお食事デートに応じることにしたの。

翌日の太郎さんのメールでの誘いにOKの返事を出したら、もう途端に電話がかかってきた。

『アイミーちゃん。ありがとう。ありがとう。それじゃ今から迎えに行くよ』

「えっ？ 今から？」

『善は急げって言うからアイミーちゃんの気が変らないうちにね』

電話が切れた。

ちょっと、これって急展開過ぎない？

私も慌てて外出の準備にとりかかった。

もちろん涼子には事の顛末をメールしておいたの。正直言って一緒に付いて来て欲しいくらいだったけど。

秋物のニットのワンピースを着て、私は家の外に出て太郎さんを待っていた。

やがて例のド派手なスーパーカーがやって来た。

運転席のドアが上に跳ね上がって、中から太郎さんが降りてきた。

「お待たせ。さあ乗ってくれよ。ドライブしよう」

太郎さんは助手席側のドアを跳ね上げると私の手を取って座席に座るのを手助けしてくれた。

案外、紳士的かもね。

でも、座ってみるとこのシートはすごく低いなあ。まるで地面に直接座っているみたいだよ。

それに油断するとワンピースの裾が捲れて外の人からフロントガラス越しにパンツを覗かれそう。

そんな事を考えていたら太郎さんが運転席について車をスタートさせたの。

外で聞くと勇ましいエンジン音がするけど、中に入れば割と静かなもんね。

だけどこの加速は凄い。シートに体が押し付けられてジェットコースターのようなだよ。

こうして私を乗せたスーパーカーは、アッと言う間に郊外に出て高速道路に乗ったの。

どこに行くつもり？

化けの皮

「どこに行くんですか？」

「御殿場にウチの別荘があるんだ」

「別荘に行くの？」

「一緒に泊まる？」

「い、いえ、遠慮します」

「残念。でもそうじゃなくて別荘の近くに美味しいレストランがあるんだ」

「はぁ、別にそんな特別なレストランじゃなくてもいいのに・・・」

「アイミーちゃんとの初デートだもん、特別な店にしないとね」

うわぁ・・・話しづらい。

どう切り出せばいいの？

今、ここで話しちゃった方がいいかな？

そうだよ。あんまり期待を持たせたら悪いもん。

よし、話そう！

「あの・・・太郎さん？」

「うん？ 何？」

「私、実は・・・」

「実は好きな人が居るんです。だから太郎さんとはお付き合いできないの」

「どうして？ まだ付き合ってる訳じゃないんだろ」

「えっ？ どうしてそれを知ってるの？」

「アイミーちゃんのことなら何だって知ってるよ。相手は健二だろ？」

「・・・・・・・・」

「妹から聞いてるよ。だが諦めた方がいいぜ。健二は妹が狙ってるからな」

「紗枝子さんは健一さんと婚約してるんでしょ？」

「健一は単なる結婚相手だよ。だが愛してなんかいない。妹が愛してるのは健二の方だ」

「そんなの変です！」

「これが金持ちの世界なんだよ。いわゆる政略結婚ってやつだ」

「政略結婚？ 愛は必要ないの？」

「妹が健一と結婚したら橘学園は将来ウチの傘下に収めるつもりさ。そうなればウチの方が格上になるんだよ。愛とか恋とかは二の次さ」

「そんな・・・」

「アイミーちゃんも健二なんかやめて僕と付き合いなよ。豪徳寺財閥は橘のところとは財力の桁が違う。僕の愛人になれば贅沢な暮らしができるぜ」

「愛人・・・」

「悪いけど結婚という訳にはいかないんだ。ウチくらいの家柄になると結婚相手もそれなりの家から迎えないといけないものでね」

いつの間にか車は高速道路を降りていた。人気の無いワインディングロードを太郎さんは凄いスピードで走り抜けていく。その目が血走っていた。

「ちょ、ちょっと怖い！」

「大丈夫だよ。僕の腕を信用しなよ。もうすぐ別荘につくから」

広い敷地の中に大きな別荘が見えてきた。その周りに人家はない。

別荘の前に車を止めると太郎さんはさっさと降り立った。

そして、助手席側のドアを開けると私の腕を掴んで車から引きずり出したの。

「嫌だ！ 痛い！」

「さあ、今からいい事しようぜ！ アイミーちゃんは今日から僕の女になるんだよ！」

「イヤーーッ！！！」

私はその手を振りほどくとそこから逃げ出した。

「アッハッハ！ 逃げても無駄だよアイミー。この近くには誰も住んでない。助けは来ないよ！」

背後から聞こえる太郎の声を無視して私は必死に敷地の外に向かって走った。

広い。広過ぎるよ、ここの敷地は。どこまで逃げたらいいの？

私は途方に暮れながらも必死に走り続けた。けどもう限界だよ。

私は疲れで足がもつれて何度も転びそうになりながら逃げ惑ったの。

太郎はオフロードバイクに乗り換えて私を追いかけていた。そしてもう一歩も動けなくなった私を見つけてゆっくり近付いてきたの。

「もうお終いかい？ もっと僕を楽しませてくれるのかと思ったのに意外と体力無いねえ。それとも観念したのかな？」

太郎はバイクを降りると草むらにしゃがみ込んで息も絶え絶えの私のそばに近付いた。

「いや・・・助けて」

「もう僕のモノだ」

私はそのまま草の上に仰向けに組み敷かれた。抵抗しようとしても体に力が入らない。

太郎の掌が私の右の乳房を掴み、その唇が私の首筋を這う。

いや・・・。

犯される・・・。

バキッ！

鈍い音がして突然太郎が吹っ飛んだ。

私はその瞬間、何が起きたのか分からなかった。

「大丈夫か？ 怪我は無いかアイミー」

橘先輩だった。私の横には気絶した豪徳寺太郎がノビていた。

そして橘先輩の後ろには健一さん、涼子、隆俊さんの姿もあった。

私は思わず橘先輩に抱き付いてワンワン泣いた。

「エー——ン！！ 怖かったよ——！」

橘先輩は黙って私をしっかりと抱きしめてくれた。

レイプされるってこういうことなんだ。

私の場合は未遂で終わったけど、助けが来なかったら私はあのまま犯されていたんだ。

今さらに恐怖が甦って、私の体はガクガクと震えた。

少し落ち着いてから橘先輩に話を聞いたら、橘先輩達は最初から私達の車をつけていたんだって。

私が最後に涼子に送ったメールに危機感を感じた隆俊さんが橘先輩に転送してくれたらしいの。

そして橘先輩はバイク、涼子と隆俊さんは健一さんの運転する車に同乗して追いかけたということだった。

さすがに豪徳寺絡みなので健一さんも狩り出されたのね。

でも私の話を聞いて一番憤慨してたのは健一さんだった。そりゃそうよね。

そして健一さんは早速携帯電話でお父さまに連絡を入れたの。もちろん豪徳寺紗枝子との婚約解消を申し入れるためにね。

やっと気絶から覚めた太郎は健一さんが携帯で話している内容を聞いて観念した様子だったわ。

これで橘学園が豪徳寺財閥に吸収される危険は去ったということかな。

私が貞操の危機を乗り越えて阻止したんですから、健一さんには感謝してもらわなくてはね。

とりあえずメダシ、メダシということかな。

それと私は橘先輩のバイクに乗せてもらって帰ったんだけど、走りながら橘先輩は私に一言ボソッと言ったの。

「お前は俺が守る！」

これって愛の告白って受け取ってもいいのかな？

慌ててもう1度聞き返したけど、橘先輩はもう言ってくれなかった。

呆気ない幕切れ

10月に入って間も無くのことだった。私は朝、何気なく新聞を開いてみて驚いたわ。

そこには連続強姦事件の解決を報じる記事が大きく載っていたの。

犯人は橘学園の近くに住んでいた無職の2人の男で46歳と39歳だって。

誰よ20代って言ったの。

なになに、動機は上流家庭の令嬢に対する憧れ？冗談じゃないわよ、まったく。

そんな邪な欲望の犠牲になった4人の女子学生が可哀想だよ。心の傷は一生消えないんだから。

同じクラスの谷岡道子もあの事件以来1度も登校していないもの。イヤミで嫌な女だったけど気の毒なことになったものよねえ。

危うくレイプされそうになった私には、その怖さや悔しさがよく分かるよ。

学校に行っても、みんなの話題はこのレイプ犯逮捕についてだったわ。

そしてチームGLとしても今後の計画を見直すことになったの。

これまでは連続して発生した事件、いわば非常事態に対する重点的な対策だったけど、一応事件は解決した訳だし今までのように大規模な体制でのパトロールも必要なさそうだしね。

ところが、そんな話をチームGLの首脳陣でしていた矢先に学園の理事会からお呼びがかかったの。

私を呼びに来たのは橘先輩だった。

橘先輩は私と涼子、そして隆俊さんを理事室に連れて行ったわ。

初めて見る理事室の仰々しい雰囲気に対し少し緊張していた私だったけど、橘先輩に言われるままに応接セットのソファに腰掛けて待っていたの。

私達4人が到着して5分くらい経った頃に、複数の人達が理事室に近付いてくる足音が聞こえてきた。

入り口のドアが開いて、最初に顔を見せたのは橘先輩のお祖父さまである理事長だった。

「やあ、諸君お揃いだね。お呼び立てして申し訳ないね」

理事長はニコニコしながら私達のそばに歩み寄ってきた。その後ろには3～4人の理事達が同行していた。

そして更に後ろには警察の制服を着た年配の貫禄ある人が2人続いていた。

私達はこれから何が起きるのかと少し不安な気持ちで理事長の口が開くのを待っていたの。超ドキドキ！

「今回の一連の事件が解決したのは君達も知っていると思う。実はその件について警察署から署長さんがお見えになっているんだ」

「署長の前川です。この度はみなさんにご協力を頂いたお蔭で無事事件を解決することができましたのでご報告に参りました」

「犯人の2人を尋問したところ、計画的に橘学園の女子学生を狙って犯行を重ねたことが分かりました。しかし実行できたのは予定の3分の1だったんです」

「3分の1？」

「はい、犯人達は予定通りに実行できないような状況に追い込まれていたんですよ。皆様がこの夏に実施してくださった大パトロールのお蔭です。その間に我々の捜査員が犯人達を追い詰めることが出来ました」

私達4人は顔を見合わせて微笑んだ。そりゃそうだよね。私達の目をかいくぐって犯罪を犯すなんて不可能だよ。

「そこでこの度の皆様のご活躍について警察としても表彰をさせて頂くことにしました」

「マジで？」

何だか凄いことになってきたよ。私達のチームGLが警察にまで認められたってこと？信じられない。

理事長もニコニコしながら言った。

「君達のチームGLでしたっけ？健二からも話は聞いていましたが、このチームGLを我が学園としましても公認のサークル活動と認定することにしました」

「ホントですか？」

「はい。ところでこのGLというのはどういった意味なんですか？」

私と涼子は慌てて顔を見合わせた。涼子も焦った顔をしている。

橘先輩と隆俊さんは下を向いて笑いを噛み殺しているみたい。肩が震えてる。

「え、えっと・・・その」

まさかガールズラブなんて言えないし・・・どうするのよ、私。

その時、閃いた！

「グ、グッドラックです」

「ほう、グッドラックですか・・・良い名前ですね」

ホッとした。涼子も安堵の表情を浮かべている。

「うちの健二はガールズラブとか何とか言っておりましたが・・・」

ゲッ！

ちょっと、マジ？

慌てて後ろを振り返ると橘先輩は素知らぬ顔ですましていた。その横で隆俊さんは笑いを堪えるのに必死の様子だ。

もう、男子ってどうしてこうなのよ・・・。

とにかく、私達は何とかその場を取り繕うことに成功した。

そして、警察署長さんから表彰状を、理事長からは公認サークルの証明書をそれぞれ授与されたの。

これでお墨付きだね。

授与式の後、1時間くらい署長さんから今回の捜査の裏話なんかも聞いて勉強させてもらいました。

更にパトロールを行う時の注意点なんていうレクチャーまで受けちゃった。

おまけに、将来は婦警にならない？なんて勧誘まで受けてしまったの。もちろん丁重にお断りしたけど。

理事室を辞した後、私達4人はチームGLの今後の活動方針について再度話し合いを持つ必要があったわ。

こんな表彰までされちゃったら、事件が解決したからパトロールは終わり！なんて言えないもん。

いつの間にかチームGLは街の正義を守る軍団みたいなイメージになっちゃったのよね。

始まりは乙女の気紛れ、それが次第に仲良しグループへと変わってゆき、現在では弱き者の味方なのであります。

でも初心忘れるべからずだよ。気紛れで出来た仲良しグループの要素は無くしたくない。

やっぱり学園生活を楽しくするのがチームGLの本来の姿だよ。

うん、これで決まり！

私達が学園から公認されてしばらく経った頃。

驚いたことに、近隣の高校からもチームGLへの参加希望者が現れたの。

それも1人や2人じゃなくて数十人単位で。

もちろん仲良しチームの本筋としてはハッピーカムカムなんだけど、一応学園から予算が付いている訳だからなあ……。

もうこうなったら各高校にもチームGLの支部を作ってもらって連携をしていくしかないよね。

でも、さすがにここまで大きな組織になってしまうと私の手には負えなくて橘先輩に相談したの。

その結果、なんと健一さんが事務局を引き受けてくれることになったの。

あの昼行灯の健一さんで大丈夫かしらと心配だったけど、始めてみたら結構優秀なマネージャーだということが分かったの。

わずか半月くらいの中に各高校にサークルを立ち上げて、組織作りも完了させてくれたんだよね。

各校のメンバーを合わせると、なんと800名を超える人数になったんだよ。

ここまで成長した組織は何をやるにも大変だけど、基本方針である『仲良し精神』を大切にしているから、気軽に気安くお気楽に活動をしているから、チームGLに関して言えば運営の苦労はあまり感じないで済んでるの。

そして、街のパトロールだけど今でも継続しているんだよね。人数が増えたからパトロールが回ってくるのは2週間に1度のペースになって楽になったけど、この活動はチームGLの基本だから今後も続けていくことになるわね。

チーム運営はこれでよし。

あと残る課題は自分の恋だよなあ。

ふう～、切ない……。

恋敵

そう言えば夜行祭りの夜に豪徳寺紗枝子が言っていたケイコさんって誰なんだろう？

私って、まだまだ橘先輩のこと知らないよね。

こんなに好きなのに、どうして知らないことばかり多いんだろう？

涼子なら知ってるかな？

聞いてみようかな？ 涼子なら教えてくれるよね。

でも何だか知るのが怖い気がする。

豪徳寺紗枝子を知っていたということは、学園内では有名だったのかな？

あの時の口ぶりだと橘先輩がケイコさんのことを好きだったのは間違いない。

問題は今もケイコさんを忘れられずに居るのかどうかってこと。

もし忘れられないのなら私なんかかどんなに頑張ってみても駄目だよ。

今まで橘先輩と一緒に居られて本当に幸せだったけど、もし橘先輩が私じゃなくてケイコさんを選んだとしたら、もう一緒には居られないよね。

そんなの嫌だ。

今はまだ一緒に居たい。

それじゃ、結論を先延ばしにする？

でもそれって何の解決にもならないよ。

私は今のまま悩み続けるだけだよ。

どうしよう・・・。

「アイミー、最近元気がないけど何かあったの？」

さすがに涼子は親友だけあって私の少しの変化にも敏感だった。

「涼子は好きな人いる？」

「好きな人？ いるよ」

「えっ！ 誰？」

「内緒」

「あーん、ずるいよ」

「エヘヘ、知りたかったらまずアイミーが橘先輩に告白してからね」

「そんなの出来る訳ないじゃんよー・・・」

「えっ？ 何で？ どうしたのよ弱気になって」

「やっぱり私じゃ駄目のような気がする」

「そんな事ないって」

「だってさ・・・」

「何？」

「涼子はケイコさんって人を知ってる？」

「えっ！？ どうしてアイミーが慶子さんのことを知ってるの？」

「やっぱりケイコさんって有名なのね」

「一部の人には確かに有名だけど・・・」

「橘先輩、ケイコさんのこと好きなんだよね？」

「好きというか・・・」

「よくある年上の人ってやつだよ。憧れの存在っていうの？」

「橘先輩の憧れの人か」

「うん、先輩より2つ年上で高校までは橘学園だったの。今は国立芸術大学でピアノを勉強してるわ」

「それで？」

「えっ？ そ、それだけのことよ・・・」

何か隠してる。そう直感したの。涼子でさえ話せないようなことって何なの？

私に話せないような事が過去にあったの？

橘先輩はその人と何らかの秘密を共有しているっていうの？

私だけ除け者？

それは何か得体の知れないモノが私の中で疑心暗鬼となって渦を巻いているような感じだった。

苦しくて、悲しかった。

私はまだ見たこともないケイコさんの影に怯えているような気がしたの。

橘先輩と一緒に居ても、ケイコさんの影が付きまとっているような錯覚に襲われてしまって、前のように心から楽しむことが出来なくなっていた。

このままではいけない。

やはり自分の気持ちを整理しないと私だけじゃなくて周りの人達にも気分の悪い思いをさせかねなかった。

私は決心した。明日、国立芸術大学に行ってみよう。

ケイコさんという人に会えるものなら会ってみたい。そして出来るものなら橘先輩との事を教えて欲しい。

もう恥も外聞もない、そんな気持ちだったの。

翌日、私は学校を自主休講にしてケイコさんの通う国立芸術大学に行ってみた。

その見るからに歴史のありそうな建物が立ち並ぶ光景は私の侵入を拒んでいるかのように感じられた。

確かに私のような部外者がウロウロするのはいけないんだろうけど、この際そんなこと言ってられない。

だけど結構広いキャンパスだし、そもそも私はケイコさんの顔も知らないんだから何を頼りに探せばいいんだか分からないよ。

また私の悪い癖が出た。先のことまで考えずに行動に出ちゃうのはマジで止めた方がいいよね。

でもここは勇気を振り絞って誰かに聞くしかない。

私はキャンパスの中央にある噴水の脇で通り過ぎる学生を観察したの。

どうせ聞くなら優しそうな人がいいや……。

しばらくしたら少し野暮ったい感じの女子学生が歩いてきた。私の想像では今年田舎から出てきたばかりの1年生かな？

恐る恐る声をかける。

「あの……ちょっとすみませんが」

「はぁ、わだす？」

この返事で私はピンと来るものがあった。間違いなくこの学生は東北出身者だ。言葉のイントネーションに隠しきれない方言の跡が残っている。

何だか嬉しくなった。

「あの私、この近くの橘高校2年の早乙女愛美と申します」

「わだすは斉藤敦子と申します。打楽器科1年よ」

「失礼ですが、東北のご出身ですよね？ 実は私も春まで仙台に居たんです」

「あれまあ、そっだの？ 嬉しいごど。わだすは岩手県の宮古市だよ」

斉藤さんは途端に笑顔になって親しげに私に接してくれるようになった。やっぱり東北出身者って都会で出会うと懐かしさのようなものを感じてしまうのよね。

「ピアノ科ってどこにあるんですか？」

「ピアノ科？ えっとピアノ科はね、あそこの建物がまるまるそっだよ」

「ついでにお聞きしますけど、ピアノ科2年のケイコさんって人をご存知だったりしませんか？」

「ケイコ？ 苗字は？」

「それが分からないんですけど・・・」

「ケイコねえ・・・ありふれた名前だしねえ。でも木下慶子さんっていう2年生が居ることは居るよ。字はね、森の木に上下の下、慶弔の慶に子供の子」

「どんな人ですか？」

「たぶんこの大学で1番ピアノが上手いよ。下手な講師よりもね。それに・・・大きな声では言えないんだけど・・・」

斉藤さんは私に顔を近づけ声のトーンを落として話し出した。

「木下さんね、片目が義眼なのよ。すごい美人なんだけど義眼の方の目の動きが少し悪いからすぐに分かるのよね。もう可哀想と言うか、もったいないと言うか・・・」

「病気か何かで？」

「わだすは分からないの。まだ1年生だから。でもわだすが入学した時にはもう義眼だったよ」

「そうですか・・・その木下さんって人の顔が分かるようなモノって無いですかねぇ？」

「うーん・・・あ、そうだわ。木下さんなら今日も学校に来てる筈だから今から覗きに行く？」

「えっ？ そんなことしてもいいんですか？」

「たぶん午前中は大教室で座学だから、紛れ込めば誰にもバレないわよ。わだすに付いて来て！」

まったくこの斉藤さんという女性は面倒見がいいというかお節介というか、まるで田舎のオバちゃんといった感じの人だった。

斉藤さんはピアノ科の教室の前の廊下に貼ってあった講義予定表をしばらく見ていたが、ニッコリとして振り向くと言った。

「分かった。木下さんはこの後は第3階段教室でフランス語の授業だよ。わだす達も一緒に受けましょう」

「えっ？ 斉藤さんも付き合ってくださいなの？」

「同じ東北出身のよしみだよ。気にすんなって」

「ハア・・・」

私と斉藤さんは大きな階段教室の中に入って行った。

斉藤さんは教室内をグルリと見回すと、私の脇腹を突っついて小声で言った。

「あれあれ、あそこの真ん中に座ってるのが木下さんだよ。顔が見えるようにわだす達は前列の端に座りましょうよ」

私は言われるままに斉藤さんと階段状の座席の最前列の端に着席した。

周りにはギッシリ学生達が詰まっていた、部外者が侵入していても全く目立つ気配はなかった。

また斉藤さんが小声で教えてくれた。

「この講義は難しいから単位を落とした3年や4年も受けてるのよ。だから人数が多いの」

「なるほど・・・」

大学の授業って面白いな。クラスって感じじゃないんだ。あれっ？ 紙が回ってきたよ。なにになに出席票ですって？

「これに名前を書いて授業が終わったら講師に提出するのよ。でもわだすとあなたは出したら駄目よ」

また斉藤さんが小声で教えてくれた。

私は右手の親指を立てて了解の仕草をしてみせた。

授業が始まった。初老の講師は学生達には全く興味が無いように、ただ文献らしきものを朗読しているだけだった。

周りの学生達は1人また1人と眠りに落ちていく。内容が難しい上にこの授業じゃ落第者が多いのも当然だよな。

でも私は、斉藤さんの体を楯にしながら木下さんの様子を窺っていた。

斜め下の方向から見上げるような感じだったけど、その容姿は同じ女から見てもウツトリするほどの美貌だったの。

白い肌、長い黒髪、ビーナスのように整った顔立ち、姿勢の良い体は基本的に細いけど胸や腰のあたりが適度にボリュームがあって、まさにナイスボディって感じだった。

居眠りする学生が多い中、木下さんはキリッとした顔を崩さずに一所懸命に講師の話に集中していた。

これが橘先輩の憧れの人なのかなあ？

もしそうだったら全然勝ち目は無いじゃん……。

私は木下慶子の姿に見とれながら同時に気分が暗く落ち込んでいくのを感じた。

その私の隣では斉藤さんが舟を漕ぎ出していた。

お願いだからイビキはかかないでよ……。

授業が終わるまで、本当に長い90分だった。

授業が終わり、学生達は続々と教室を出て行く。

私と斉藤さんは最後まで粘って座っていた。木下さんがなかなか席を立たなかったからだ。

だが、やがて席を立った木下さんは出口に向かって歩き出した。もうすぐ私の脇の通路を通り過ぎる。

私は相手に気付かれないように注意しながら、木下さんの顔を注視した。

あっ、確かに顔つきが左右対称じゃない。左の目だけが何だか奥目のように見えた。

他が完璧なだけに左目の義眼だけが惜しまれると思わざるを得なかった。

階段教室を最後に出た私達は、そのまま大学内のカフェテリアに行った。

「木下さんをよく見れたかしら？」

「はい、おかげさまでバッチリ拝見しました」

「結局、木下さんが目的の人だったの？」

「まだ分かりません。学校に帰ったら親友に聞いてみます」

「もし良かったら話を聞かせてよ」

ここまで親切にしてくれた斉藤さんだから、無下に断ることも出来なかった。

だいぶ端折ったけど概略だけ話したの。要するに片思いの男性の憧れの人への調査に来たってことを。

私の話を聞く斉藤さんの表情は、まさにワイドショーの画面に釘付けになっているオバちゃんそのもの。

ちょっと怖かったよ。

「なるほどねえ、好きな人が木下さんみたいな美人に夢中だったら悲しいわよねえ・・・人違いであることを祈るわ」

「はぁ・・・そう言われると何だか木下さんが問題の人のような気がして、うううう・・・」

「あらあら、涙なんかこぼして・・・可愛いわねえ。大丈夫だよ、あんたのような可愛い子なら木下さんも敵わないから」

それがお世辞であることぐらい私にだって分かる。

だけど斉藤さんの優しさには救われる思いだったの。

偶然だけど良い出会いが出来たことは本日唯一の収穫だったかもしれないなあ。

それから私達はお互いの連絡先を教え合って別れたのでした。

残酷な運命

その夜、私は涼子の家を訪ねたの。

「アイミー、今日はどうしたの？」

「ケイコさんって、もしかして木下慶子さん？」

「えっ？ 知ってるの？」

「やっぱり木下さんだったのね・・・」

私は絶望感に襲われてその場にしゃがみ込んでしまった。

「何があったの？ ねえ中に入って話そう・・・」

涼子の部屋で私は切ないお願いをしたの。

「ねえ、何があっても驚かないから橘先輩と慶子さんの事を全部教えてよ」

「どうしたのよ？」

「私、今日学校を休んで国立芸術大学に行ってきたのよ。そして木下慶子さんの姿を見てきたの。本当に綺麗な人だった。でも何故彼女は片目を失ったの？」

「アイミー・・・」

「どうして橘先輩は木下さんと交際しないの？」

「その事について説明するのは私より兄の方が適任だと思う。ちょっと待って」

涼子は部屋を出て行くとすぐに隆俊さんを連れて戻ってきた。

「アイミーはそんな事を気にする必要なんて無いんだけど・・・」

隆俊さんはそう前置きしながら、それでも全てを教えてくれたわ。

「確かに健二と慶子さんは昔付き合っていたよ。あの2人は実は遠い親戚同士でね、付き合い自体は長いんだ。そして恋人同士の付き合いに発展したのは健二が高校に入ってからだね。

だけど去年の夏に事故があってね・・・健二のバイクが居眠り運転の乗用車に追突されて、バイクの後ろに乗っていた慶子さんが片目を失明する大怪我をしたんだ。

当然だけど慶子さんのショックは大きかったようだ。しかも慶子さんのお父さんが激怒してね。2人の仲を引き裂いてしまったんだ。

その時以来、慶子さんも健二と会うのを意識的に避けているようだって健二が言ってたよ。

そう言えば慶子さんは大学を卒業したらフランスに渡るらしいよ。そうなれば本当に健二とはお別れってことだよな」

「ね、アイミー、これは終わった事なの。だからアイミーが気にすることなんてないのよ」

「そうだよ。アイミーは健二のことが好きなんだろう？だったら慶子さんのことなんて忘れなよ」

何を聞いても驚かないなんて大見得を切ったくせに私はそのあまりに残酷な運命に呆然としていたの。

橘先輩がそんな悲惨で過酷な経験をしていたなんて想像も出来なかった。

隆俊さんから話を聞いて以来、正直言って私は橘先輩の顔が素直に見られなくなってしまったの
。

きっと橘先輩は慶子さんに対して責任を感じているんだよね。

私に対して優しく接してくれていたのは、あくまでもチームの仲間だからであって恋愛感情なんかじゃなかったってことだよ。

私が勝手に橘先輩を好きになって、橘先輩も私のことを好きかもしれないなんて勝手に思っただけなんだよね。

なんか惨めだよ……。

悲しいよ……。

涼子や隆俊さんの慰めも全然心に響かない。

橘先輩本人に聞いた訳じゃないけど、こりゃどう考えたって私に分が悪いよ。

あの木下さんになんて逆立ちしたって敵いっこないもん。

でも、その木下さんは橘先輩に冷たく当たってるなんて酷いよ。

事故は橘先輩のせいじゃないのにさ。

もう、木下さんに一言文句を言ってやらないと気が済まないよ。

よーし、明日また大学に行ってやる！

そして木下さんに思いっきり文句をぶつけてやる！

そして……、

そして、橘先輩への想いはキッパリ諦める。

悲しいけど。

翌日、学校が終わると私は早速木下慶子に文句を言うために国立芸術大学に向かったの。

昨夜は悲しくて寂しくて枕が涙でグショグショになるくらい泣き明かしたけど、もう今は逆ギレ状態になってる。

きっと一度文句が口から出始めたら止まらないかもしれないくらいの興奮状態だよ。

絶対に許さないんだから。

私の大好きな橘先輩に辛く当たる木下慶子なんて、絶対にブッ飛ばしてやるんだから。

私は鼻息も荒く、大学の構内に入って行った。

きっとピアノ科の建物のどこかに居るわよね。

絶対に探し出してやる。

私は目を皿のようにして建物の中を探し回った。

そして、ふと2階へ続く階段辺りに目を向けた時、私は見たくないものを見てしまったの。

それは、

階段脇の狭いスペースで、

木下慶子が橘先輩を抱き寄せていたの。

橘先輩は、

無抵抗に、

目を閉じて、

俯いて木下慶子に抱きしめられていたの。

私は・・・頭の中が真っ白になった。

見たくないのに私の目は抱き合う2人に釘付けになって、後ずさりでその場を離れる間も目を見開いて2人を見ていた。

そして2人の姿がやっと廊下の曲がり角に隠れて見えなくなった瞬間、私はクルリと回れ右して駆け出していた。

もう涙が後から後から溢れ出てくる。

涙で景色が歪んで、私は何度も転びながら大学の構内から逃げ出した。

それまで必死に我慢していたのに大学を出た途端に嗚咽がこみ上げてきて、私は子供のように泣きながら家に帰ったの。

翔太の奴が驚いた顔で私を見てたけど、私は涙で濡れた顔を両手で隠して自分の部屋に籠もるとベッドにもぐり込んで枕に顔を押し付けてワンワン泣いたの。

もうどんなに振り払おうとしても橘先輩と木下慶子の抱擁シーンが脳裏から離れることはなかった。

私は、ただ泣くことしか知らない子供のように何時間も泣き続けたの。

だって、それ以外に私に出来ることなんて何一つ無かったんだもん。

自暴自棄

次の日、私は涼子にしばらくの間チームGLから離れることを告げたの。

もちろん涼子はビックリして理由を聞いたがったけど私はもう何も話したくなかった。

涼子のことは大好きだけど、今は橘先輩につながる人には誰にも会いたくなかったの。

私がみんなを避けて1人になりたがっていることを感じて、涼子は何も言わずに私のそばを離れてくれた。

もう私は1人ぼっちだった。

寂しかった。

この街は、あっちにもこっちにもチームGLのメンバーが居るから、私は放課後や休日には都内の繁華街に出かけるようにしたの。

とにかく知らない街、知らない人の中に身を置きたかったんだよね。

田舎に住んでいた頃、渋谷や新宿、原宿や六本木なんて地名に憧れを抱いたこともあったけど、今や電車に乗れば1時間以内で行けちゃう距離。

私はその中でも特に原宿が気に入って毎日通っていたの。

そんなある日のこと。

「彼女、1人？」

私は突然声をかけられた。

ビックリしてその人を見ると、上下とも黒い皮製のライダースウエアを身に付けた若い男性だった。

「今、時間ある？」

「えっ、あ、はい・・・」

「お茶でもしない？」

「まあ、いいですけど」

「よし決まった。それじゃ俺の行きつけの店に案内するよ」

その男は私にヘルメットを渡すと自分はバイクに跨りエンジンをかけた。

チョッパータイプのアメリカ製大型バイクだった。

ドコドコと凄い音を辺りに撒き散らしている。

「さあ、乗りなよ」

私は言われるままに男のタンデムシートに跨った。

男はバイクをゆっくりと発進させた。エンジンの振動がもの凄くて、なんだかお尻がムズ痒い気分だった。

バイクは秋風の中を快調に飛ばした。男が話しかけてくる。

「俺、サチオ。君は？」

「愛美！」

「アイミー？ カッコイイ名前じゃん。気に入った」

「どこ行くの？」

「カフェに行こうと思ったけど、やっぱ止めた。このまま海まで走ろうぜ！」

海か・・・うん、いいかもしれない。

今はとにかく嫌なことを忘れさせてくれる何かが欲しいもん。

海なら私の気分を洗ってくれるかもしれない。

「気分はどうだい、アイミー？」

「サイコー！！！」

「イヤッホー！！！ アイミーもサイコー！！！」

そのバイクはタンデムシートが異常なほど小さくて私は体が安定しなかった。

仕方がないから私はその男の背中にしっかりとしがみ付いたの。

当然、私の胸が男の背中に密着してしまう訳なんだけど今の私にはそれが刺激になったのかもしれない。

それに相変わらずの振動が私の股間を震わせて、何かくすぐったいような快感が湧き上がってきたの。

その時、私は何だか凄く興奮していたわ。

1時間も走らないうちに私達は埠頭に到着したの。

そろそろ夕暮れが近くて周りのビル群にもイルミネーションの灯がともりだしていた。

私は男に抱き上げられ、お姫様ダッコ状態で防波堤の上に運ばれたの。

男はそこに座ると私を膝の上に横座りさせた。

何だか、じれったいような変な気分。

男の手が私の背中に回って私の上半身を男に向き合うように優しく捻る。

私は何だか酔ったような気分で自然に男の首に両手を廻したの。

そのまま、男に抱き寄せられて私の体は男の胸の中に収まった。

男の指が私のアゴを軽く持ち上げて、私は顔を上げさせられた。

まるでそうすることが当然のように私は瞼を閉じた。

そして、生まれて初めて私は接吻（くちづけ）をしたの。

男のなすがままに、私は男を受け入れて長い長い接吻をしたの・・・。

このまま、もうどうなってもよかった。

私はこのまま男の自由にされてしまいたいと思った。

その一瞬、橘先輩の顔が脳裏に浮かんだけど、すぐに消えた・・・。

サチオは22歳の大学生だった。私が高2だと聞いて驚いていたわ。

その後も毎日のようにサチオは私に会いに来たの。

そして毎日あちこちへ出かけて行っては抱き合っただけでそれ以上は出来なかった。

もちろんサチオはラブホテルに誘ってきたけど私にはまだ処女を捨てる度胸が無かったの。

それに、やっぱり橘先輩への想いがまだ私の中に残っていて消えないの。

私は次第にサチオに会うのが苦痛になってきたわ。

サチオのこと愛していないって分かってるから。

ただ私の自暴自棄で体を弄ばれたいと思っただけ。

でも、それすら出来なかったのよね。

それじゃサチオと付き合う意味なんて何も無い。

サチオにしても最初から私の体が目的で近付いて来たみたいだから、いつまで経っても体を許さない私に対して随分ムカついてたみたい。

ある日、とうとう大喧嘩をして別れてしまったの。

もう怒りを乗り越えて情け無さしか残らなかった。

愛情

サチオと別れてから、私はやっと自分を取り戻した感じがしたの。

やっぱり愛の無いセックスなんて有り得ない。

橘先輩を諦めたからといって他の誰かに体を満たしてもらおうなんて馬鹿げた考えを一瞬でも持ってしまったことが恥ずかしいわ。

私はやっぱりチームGLに帰るべきなんだよね。

私は特別な存在じゃなくて普通の高校生。それでいいじゃん。

恋もするけど失恋だってするよ。

そんなの当たり前じゃん。

周りは金持ちばかりなのに私は普通の子。

これも別に変なことじゃないよ。たまたま今の環境が普通と違っていただけ。

私がそれに踊らされる必要なんて無いんだ。

私は私のまま、自然体で生きて行けばいいのよ。

なんでそんな簡単な事が分からなかったんだろう。

我ながら不思議。

橘先輩と木下慶子さんの事だって私が考えるような問題じゃないよね。

復縁したのなら祝福してあげればいい。

同じチームGLの仲間として。

ただ・・・それだけのこと・・・。

久しぶりにチームGLのメンバーと会って打ち合わせをした帰りのこと。

駅に向かって歩いていたら私の後ろをつけてくる車があるのに気が付いたの。

振り向いたらそれは橘先輩だった。またお父さんの高級セダンに乗っている。相変わらずギャグのように初心者マークを付けて。

私が気付いたと分かる一気にスピードを上げて私の脇まで来て急ブレーキで停まった。

グーンと音がしてパワーウィンドウが開いた。

「乗らないか？」

「結構です」

「何を怒ってるんだ？」

「別に怒ってなんかいませんから」

「最近なんだか冷たいじゃないかよ」

「あら、そんなことはありませんわよ」

「いいから乗れよ」

あまりにしつこいから私は仕方なく助手席に乗り込んだ。

「さてと・・・どこに連れて行こうかな」

「自宅までお願いします、運転手さん」

「おいおい・・・そうツレなくするなよ。たまには付き合えって。前はよくこうしてドライブしたじゃないか」

「誘う相手が違うんじゃないやありませんこと？」

「えっ？ お前は何を言ってんだよ。俺がドライブに誘うのはお前だけだって知ってるだろ？」

「誘いやすいから？」

「お前、今日は随分と突っかかるねえ。久しぶりにチームGLに顔を見せたと思ったのに。どうしたんだよ機嫌でも悪いのか？」

「先輩の意中の人じゃ誰かってことくらい私だって知ってますから」

「俺の意中の人？ そりゃ誰だい？」

「まあ、とぼけちゃって・・・私はしっかりとこの目で見たんですからね。先輩と彼女のラブシーン」

「ラブシーン？」

「国立芸術大学のピアノ科って言えばお分かりになりますか？」

「あ？ もしかして慶子のこと言ってんのか？」

「ほら、やっと白状した」

「プッ！ アッハッハッ！ そうかそうか、お前あの時見てたのか」

「見てたのかって、人のこと覗き魔みたいになんないでください・・・」

「そうか・・・よし分かったよ。今日の行き先は決まりだ」

車は国立芸術大学の敷地に入ってピアノ科の建物の前で停まった。

「ちょっと待ってろよ」

橘先輩はニヤリと笑みを浮かべて車を降りると建物の中に入って行った。

10分後、橘先輩はあの人を連れて戻ってきた。木下慶子さんだ。

彼女を後部座席に案内して橘先輩は運転席に戻ってきた。

「改めて紹介するよ。木下慶子。俺の元カノだ」

「初めまして早乙女さん。健二さんからよくお話は伺ってますわ」

「ど、どうも・・・」

何よ、2人の仲を私に見せつけようっていうの？

「早乙女さんに、どこからお話すればよろしいのかしら？」

「アイミー、お前どこまで知ってるんだ？」

「隆俊さんから全部聞いてますけど・・・」

「あー、そういう事か。それじゃ肝心なところが分かってないな。それじゃ慶子がもうすぐ結婚することも知らないんだろ？」

「は、はい！？ 結婚？」

「慶子はこの大学の臨時講師として来日したフランス人のピアニストと来月結婚式を挙げるんだ。そして大学を卒業したらフランスで暮らすんだよな？」

「ええ、そうなの。隆俊君や涼子ちゃんは私と健二さんが悲劇的な終わり方をしたところまでしかご存知ないのよね」

「そういうことだ」

「早乙女さんもそこまではご存知のようだから、その先をお話しましょうね」

私はもう鳩が豆鉄砲をくったような顔をして慶子さんの話を聞いていた。

「ご覧のように私は左目が義眼になってしまった。これは健二さんの責任じゃないわ。もちろん私だってそれは理解していたの。

でも心理的にダメージが大きくてね。もう健二さんとお付き合いが出来なくなってしまったの。

それだけじゃないわよ。私はショックのあまり自殺未遂までしたほどなの。

そんなどん底の精神状態にあった私に愛を持って接してくれたのが今の婚約者のピエールだったの。

私はピエールによって再び人への優しさが持てるようになったの。そして再び人を愛せるようになった。

健二さんもそんな私を心から祝福してくれたわ。

実は私がピエールを健二さんに紹介したのが、早乙女さんが私と健二さんのラブシーンを目撃したあの日のよ。ウフッフ」

「私は健二さんと長いこと連絡を取れなかったの。最初は精神的に辛かったからだけど、1度疎遠になってしまうと再び連絡を取るのには勇気がいるものよ。

だけどピエールが私の背中を押してくれたの。

私はずっと健二さんに対して抱いていた申し訳ないという気持ちを伝えるのは今しか無いって言ってくれたの。

健二さんも私に対して責任を感じてくれていたから、今こそその呪縛から開放してあげなさいってピエールに言われて、私が大学に健二さんを呼び出したのよ。

私はこれまでの不躰を健二さんにお詫びしたわ。そして健二さんの私への責任感と気遣いを知って、私は思わず健二さんを抱きしめてしまったの。

そして丁度、運悪く早乙女さんにそれを目撃されてしまったという訳なの」

「これで分かったか？慌てん坊！」

「だって・・・だって」

私は突然知らされた真実に何が何だか分からなくなって気持ちが言葉にならなかった。

ただただ涙がポロポロと頬をつたい落ちた。

「でも健二さんも健二さんよね？ こんな可愛い彼女を焦らすだけ焦らして」

「お、おいおい慶子。そりゃないだろ？」

「さあ、今こそ男らしく私の目の前で早乙女さんにお話して差し上げなさい」

「えっと、その・・・」

「ほら、しっかりしなさいよ、健二さん」

「う、うるさい、少し黙ってるよ・・・」

「あら、失礼」

「アイミー、俺は、その、お前のことが・・・」

私は期待と不安が交錯する中で橘先輩の顔を穴があくほど見つめた。

「好きだ！」

「先輩・・・」

「お前を守りたい！」

「・・・・・・・・」

「俺と付き合ってくれ」

「は・・・い・・・」

それだけ言うのが精一杯だった。

後はもう子供のように泣きじゃくって言葉にならなかった。

そして最後の慶子さんの言葉が私の心にしっかり刻み込まれたの。

「健二さん、今度こそは幸せになりなさい・・・彼女と2人で」

あれから6年。

私は母校である橘高校の教諭になりました。

もちろんチームGLの顧問もしています。

チームGLは今や全国的な組織となって、会員数は5万人を超えているんです。

後輩達も日々の学園生活を充実させるために頑張っていて活動してくれています。

それから私と一緒に青春を謳歌した仲間達ですけど、みんなそれぞれの道を歩んでいます。

涼子はキャビンアテンダントとして活躍中。そして中学時代から片思いしていた学園の2年先輩の医師と婚約しました。

恵美は隆俊さんと婚約して最後の大学生活を謳歌しているところ。その隆俊さんは商社マンになってます。

カナ、ノリコ、イクの武道3人娘達はまだまだ色気より食い気のようにです。

岡島先生と順子先生は無事に結婚しましたよ。順子先生の連れ子の息子さんと、結婚後に誕生した娘さんの4人で仲睦まじく暮らしています。

そして橘先輩は学園の若き理事として全国を忙しく飛び回っています。

あまりに忙し過ぎて、この間なんか私の誕生日をすっかり忘れていて大喧嘩になったんですよ。

でもまあ、それもあと少しの辛抱かな？

実は私達、この6月に晴れて結婚することになりました。

これって玉の輿ってやつですね。彼をしっかりと尻に敷いてあげないとね。

それと、今まで大切に守ってきたモノを彼にあげるんです。

何を隠そう、私は処女を結婚まで大事にとっておいたの。

先輩、お待たせしました。もうすぐ私の全てをあなたに捧げます。

幸せになろうね、マイ・ダーリン！

今度こそ・・・。